



簡易 PDF 分割版

(3 / 4)

目次

30. 夢の世界のビジョン.....	3
■ 『人間の外面』と「シャドウ」.....	3
■ 夢世界的なものの様々なイメージ.....	5
■ ψ 3 移行ワークと夢世界.....	7
■ 「アニマ」と「アニムス」.....	9
■ 様々なイメージ.....	11
■ 死後世界的なものに入り込めるか？.....	12
31. エーテル空間を知覚していく.....	13
■ 「エーテル体」について.....	13
■ 意識の反転とエーテル空間.....	13
■ シュタイナー思想におけるエーテル体.....	14
32. 火のイメージを応用する.....	17
■ 火のイメージの応用.....	21
■ 火のイメージと反転.....	22
33. 非物質世界の知覚と霊能者について.....	25
■ 「あっち側」とのアクセス方法.....	25
■ 非物質存在との交流.....	27
■ 「他者」の意識との予期せぬアクセス.....	29
■ 「あっち側」とアクセスしないモード.....	32
■ 霊能者とは何か？.....	33
34. 次元観察子 ψ 4 の話に入ろう.....	35
■ 主体と客体.....	37
35. 「鏡像段階論」について.....	39
■ 「鏡像段階論」についての説明.....	39
■ 鏡像段階論と次元観察子 ψ 4.....	41
36.化粧で理解する次元観察子 ψ 4.....	43
■ 化粧と次元観察子 ψ 4 の接点.....	43
■ 男女差が出る話.....	45
37. 知性と情動の対化.....	46
■ 水星と金星、知性と情動の対化.....	47
38. イメージの世界を脱却できるか？.....	49
■ ニューソロジーと言語学.....	52
39. ψ 3~ ψ 4 までを整理しよう.....	55
40. 「 ψ 3~ ψ 4」のキアスム.....	59
■ 他者の瞳孔と自己の瞳孔.....	59
■ 図示して整理する.....	61
■ キアスムの奥深さ.....	64

30. 夢の世界のビジョン

ここまでの『変換人型ゲシュタルト論』では、意識の「構造」の話に重点を置いて書いていった。

これから「こころ」や「心理学」にもちょっと触れた話をしていく。

「こころ」や「心理学」のような話は『変換人型ゲシュタルト論』ではあえて詳細まで触れないようにしておくが・・・

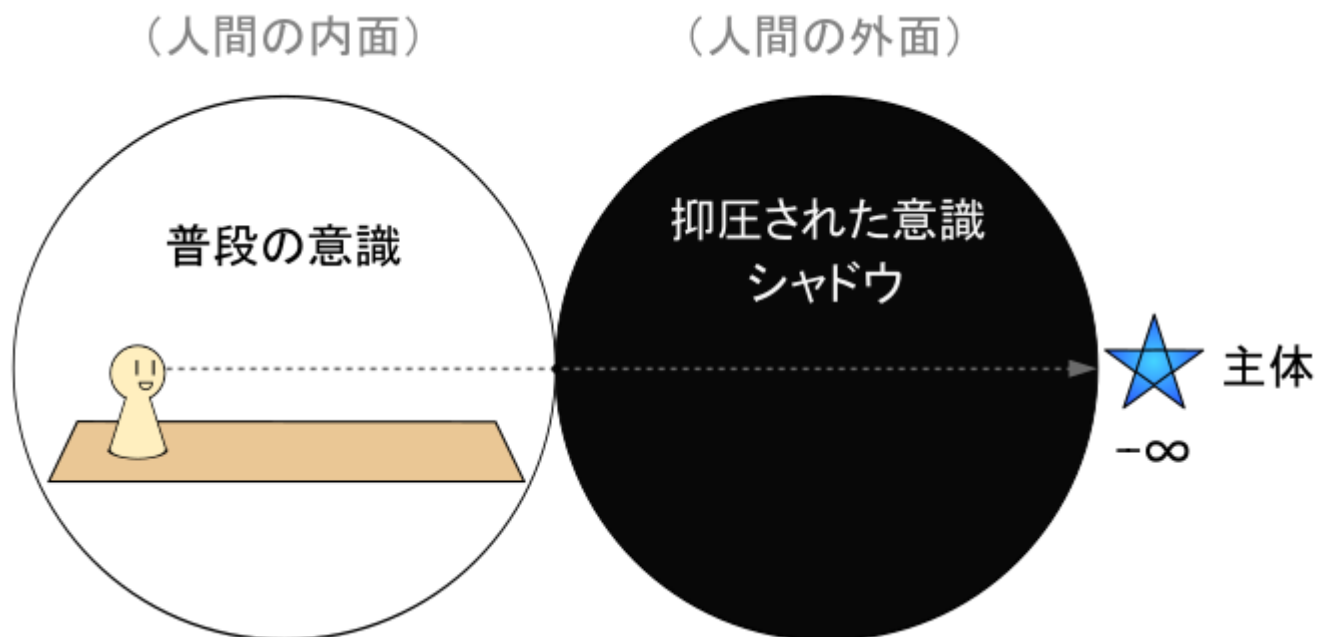
(やりたくないわけではないが、やるとなると内容が長くなり過ぎてしまうため)
当ブログでは『河合隼雄を読み直す』というシリーズも書いていて、そっちはニューソロジー用語の出てこない心理学的な内容になるが、変換人型ゲシュタルト的にも重要な内容なので気になる人はそちらも読んでもらいたい。

[リンク：■河合隼雄を読み直す(1) ～はじめに、書籍紹介～]

■ 『人間の外面』と「シャドウ」

さて、『次元観察子ψ3』や『人間の外面』を発見するとどうなるのか？

人間の通常の意識は『人間の内面』側に留まるようになっているから、それより外の意識の方向に行くとすると、普段意識しているものとは違うものが出てくるようになる。



以前書いた『[変換人型ゲシュタルトとは？（後編）](#)』の項でもちょっと説明したが、

そうすると、ユングが「シャドウ」と呼んだものが目前に出てくるかもしれない。

「シャドウ」とは「自身が今まで無意識に抑圧してきた、向き合うことを避けた負の感情」「認容しがたいと思っている心的内容」「その人の暗い部分」などと説明されるものである。



それから、シャドウ的なものは無意識的なものと絡み、**夢世界的なもの**と絡んでくる。

「夢世界的なもの」とは、人間が夜に見る夢のような世界のことである。



書籍『2013：シリウス革命』にて、「**夢の世界は死後の世界である**」と冥王星のオコツトは言っているため、夢の世界は人間の意識や死後の意識の解明のための大きな入り口にもなっている。

■ 夢世界的なものの様々なイメージ

「夢の世界」のイメージについては、
古今東西の美術や芸術でも、
様々な表現がされているジャンルである。

『サイキックの研究と分析』でもそれについて書いたことがある。

[リンク：■サイキックの研究と分析(26) ～「夢の世界」と「無意識の世界」～]





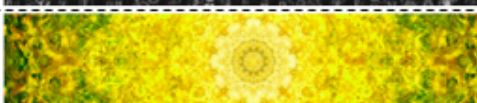
こうしたものが表現されている芸術や美術は、各々がどんな文化で育ってきたか、どんな文化が相性良いかによって好みが異なるため、各自で好きなものを見つけて慣れ親しんでいくと良いと思う。

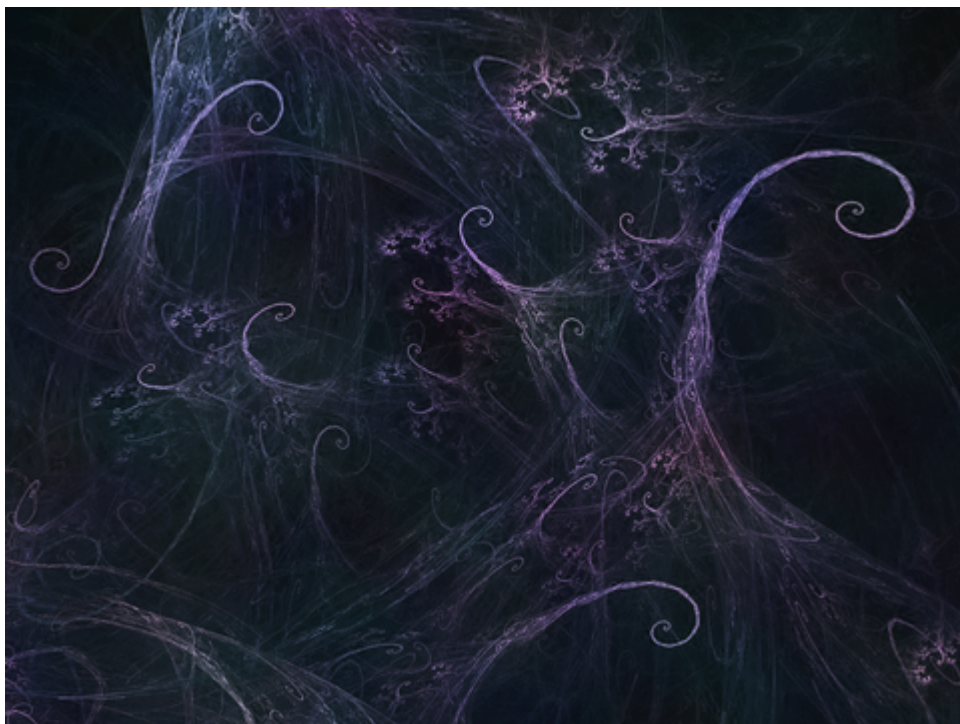
自分 (Raimu) は『東方 Project』シリーズが大好きなので、
この作品からニューソロジー理解においても重要なインスピレーションを得たと思う。
最近、プレイ動画をアップしている。

[Youtube 動画：【東方原作プレイ動画】東方妖々夢 HARD 霊夢 B]

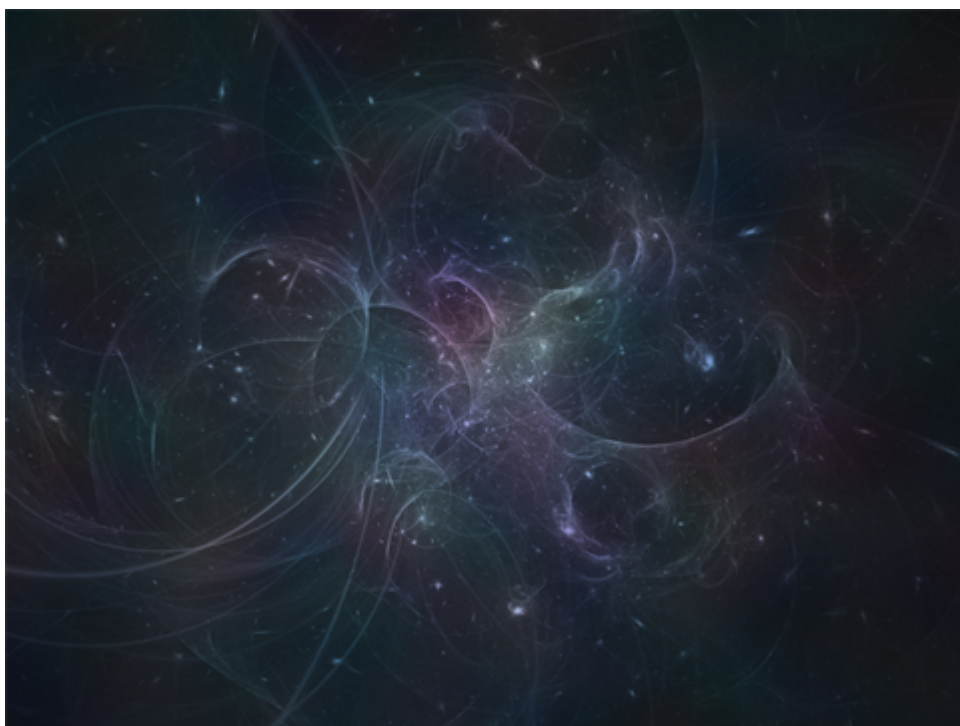
まあ、この辺の趣味の話をしだすと長くなるので置いといて・・・

自分が用意した以下のグラフィックも、
そんな感じのイメージを目指して作ってみた。
(著作権フリーの CG 素材を基に色彩加工したもの)

	ψ1～ψ2	第一層
	ψ3～ψ4	第二層
	ψ5～ψ6	第三層
	ψ7～ψ8	第四層
	ψ9～ψ10	第五層
	ψ11～ψ12	第六層
	ψ13～ψ14	第七層



なんとなく「虚数 (imaginary number)」をイメージして、以下みたいなグラフィックも作ってみた。
(これも CG 素材がベース。割とお気に入り)



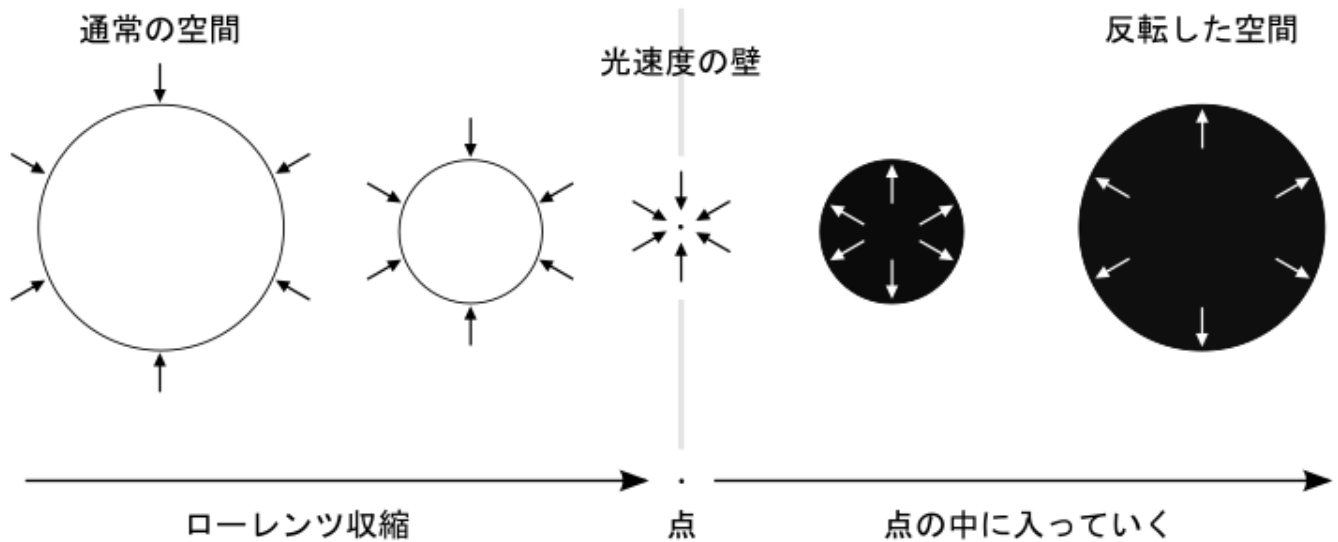
あと、「反転の門」というタイトルの作品も作ったことがある。



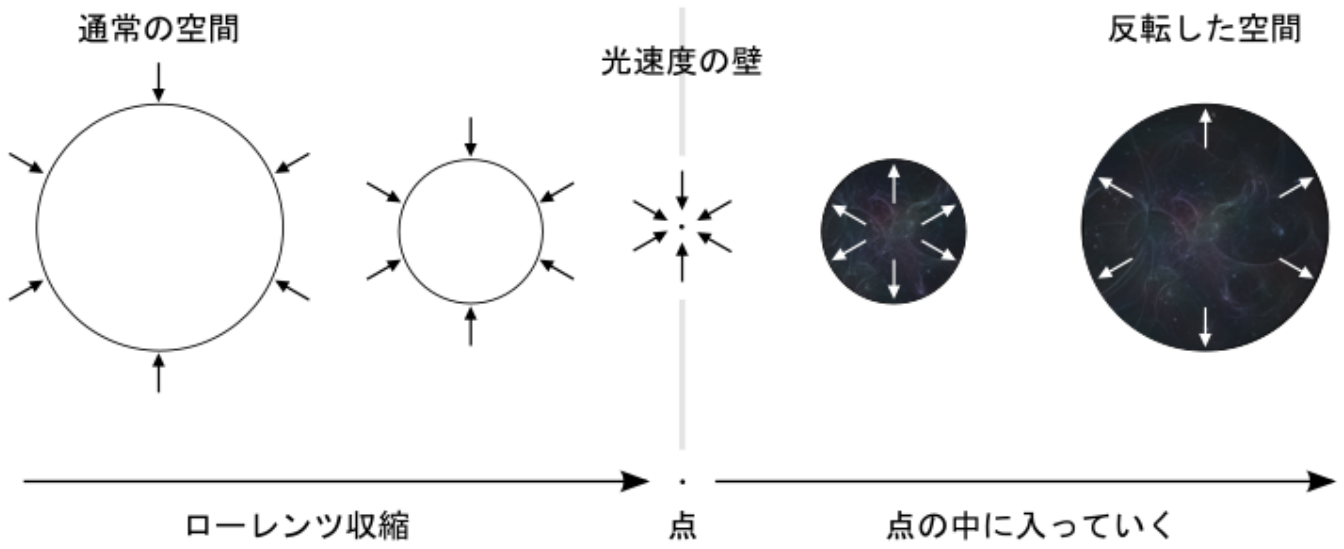
このように、ヌーソロジーを無機質な幾何学イメージで理解するだけでなく、色彩つきのイメージも絡めると良いのかもしれない？

■ ψ 3 移行ワークと夢世界

以前に「光速度イメージ」についてを書いた。



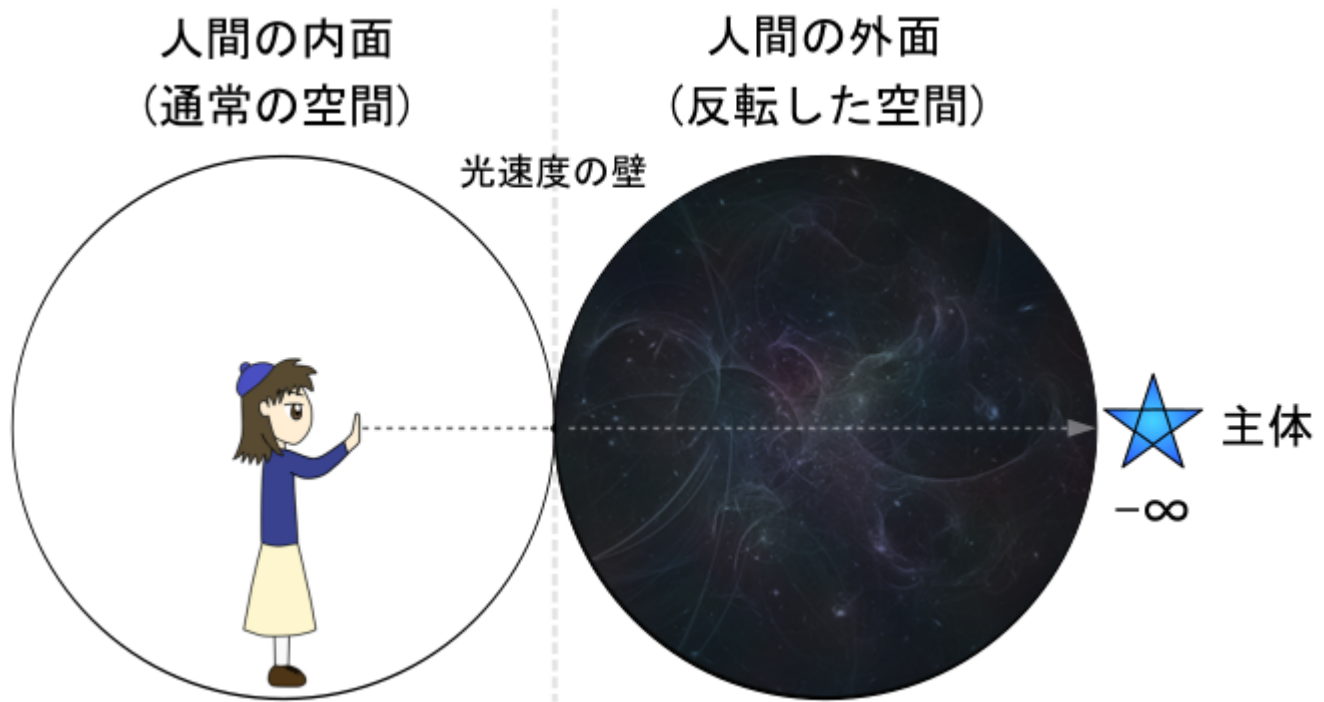
もしかすると、光速度の先にある「反転した空間」のイメージも実際にやると夢世界的なナニカが出てくるかもしれない。



それから、「平手出し」をするポーズについても書いた。



実際にそれをやってみると、そこに重なるイメージもあるかもしれない。



そんな感じで、ニューソロジーで定番となるカタチの認識のための業法でも、何か付随するイメージがあればそれと絡めてみるのも良いと思う。

■ 「アニマ」と「アニムス」

ユング心理学には「アニマ」「アニムス」という概念がある。

これも「無意識に付随するイメージ」として重要なため、軽く説明しておこう。

簡単に説明すると、**アニマは「男性の無意識人格の女性的な側面」**であり、**アニムスは「女性の無意識人格の男性的な側面」**に該当する。

ユング心理学的な無意識探求を行っていると、通常の性別とは異なる人格が無意識の中から生じてくる。

そして、それは自身を無意識の世界へ誘導するような役割を持っている。

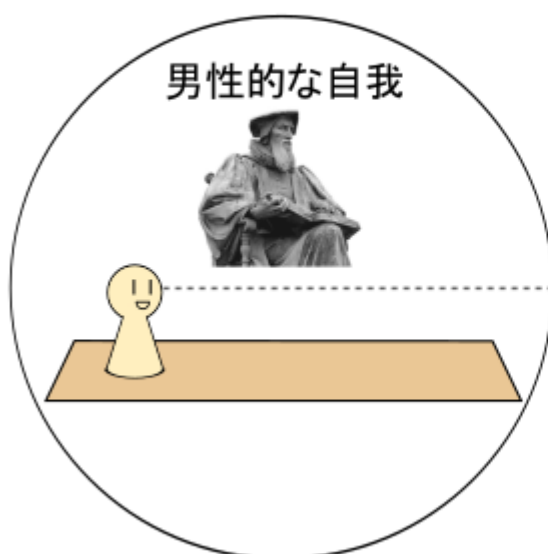
その時に出てくるイメージは「男性の場合は女性的人格」で「女性の場合は男性的人格」とされているが、実際の性別がどうなっているかが重要ではない。普段の自分の意識はどちらの性別に近いかが重要である。

つまり、女性でも普段の意識が男性に近ければアニマが生じるし、男性でも普段の意識が女性に近ければアニムスが生じる。

ユング的には、『人間の内面』側にある自我が男性に近ければ『人間の外面』にはアニマが生じるし、逆に女性に近ければアニムスが生じることになる。

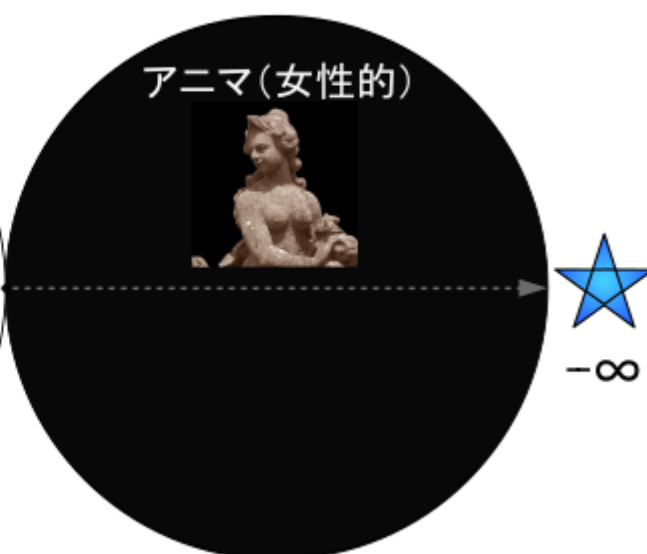
(人間の内面)

男性的な自我



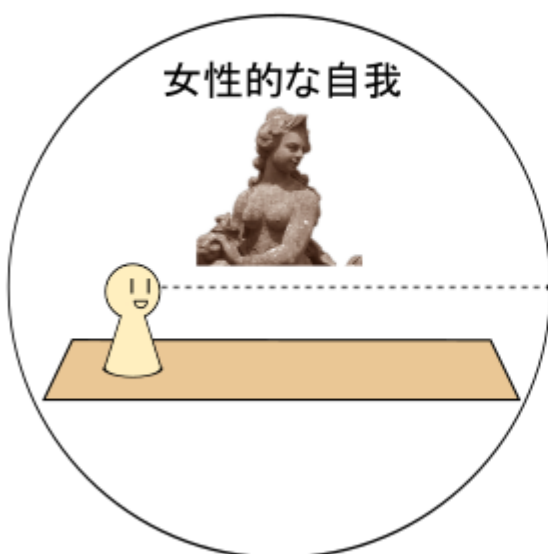
(人間の外面)

アニマ(女性的)



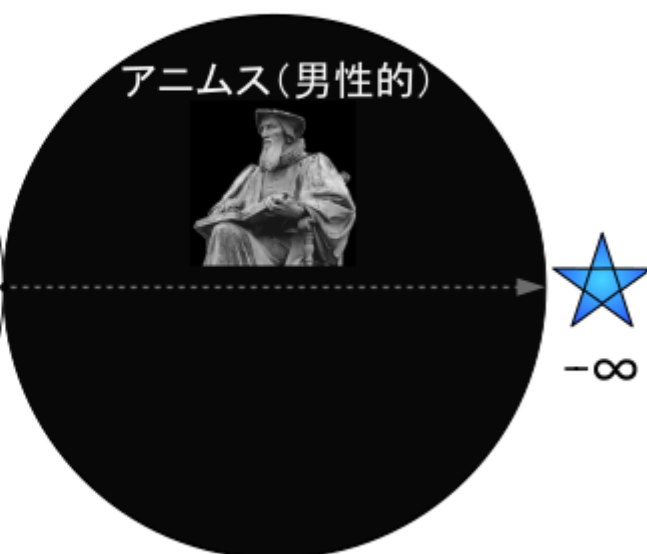
(人間の内面)

女性的な自我



(人間の外面)

アニムス(男性的)



無意識にある夢世界的なイメージの先には、アニマやアニムスのような存在のイメージもあるかもしれない？

■ 様々なイメージ

次元観察子のそれぞれに付随するイメージは色々あるだろうが、 ψ 3の段階だと「スピリチュアル的にキラキラしてる」というよりかは、どっちかというとなんとなく暗い」に近いと思う。

実は、冥王星のオコットが言うには、『人間の内面』は昼に対応しているのに対し、『人間の外面』は夜に対応しているらしい。

[リンク：シリウスファイル解説-マクロ宇宙も単なる時空として見ちゃいけない - cave syndrome]

OCOT 情報も、昼と夜は「対化」の表現だと言っていた。昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れだということ。確かに、人間は昼間は客観世界（延長）の中で生き、夜は主観世界（持続）に生きるのが基本。これは表相が等化された世界と、表相を中和した世界（表相の等化を無効にする）の関係と言っているかもしれない。

ψ 3 や『人間の外面』に付随する「なんとなく闇の世界」感は、そんな原理に基づいているのかもしれない。

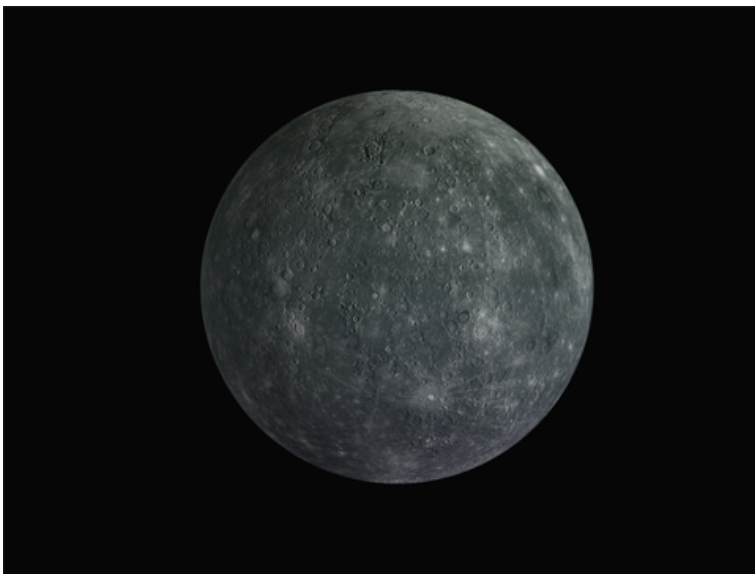
日本文化で「夜」みたいな世界にいるものといったら「妖怪」が挙げられる。



妖怪には多種多様なものがあるけど、本質的には「身体性が確立していない段階の霊みたいなもの」と捉えると、

ψ 3に付随してくるイメージだろうと思う。

また、 $\psi 3$ は惑星だと「水星」が関係してくるとして、
自分は水星のイメージを作ったりもした。



厳密には、ニューソロジー的に水星が対応しているものは $\psi 3$ ではなく、
その上位にある『大系観察子 $\Omega 3$ 』や『次元観察子 $\psi 9$ 』とされていて、水星の本質をつきつめるとそちら
に該当するのだが、

$\psi 3$ を認識すると、その背後にある大系観察子 $\Omega 3$ である水星イメージが浮上してくると捉えて良いと思
う。

■ 死後世界的なものに入り込めるか？

色んなイメージの話をしてきたが、

要するに次元観察子 $\psi 3$ は主観に紐づく世界であり、

オコツトが「昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れ」と言ったように、

「夜」のようなものとして表れるのである。

また、そうした世界は、次元観察子 $\psi 1 \sim \psi 2$ に紐づく自我が死んでいくという意味での「死後の世界」と
言えるかもしれない。

古今東西にある芸術や美術を探すと、

そうした世界を探求している作品もあるため、

それを的確に表現している芸術はニューソロジー的にとっても価値がある。

そんな「死後世界探求」の発想があると、

ニューソロジーの理解もスムーズになっていくと思う。

31. エーテル空間を知覚していく

今回は神智学や人智学に出てくる概念と
ヌーソロジーとの絡みについて説明していく。

■ 「エーテル体」について

ヌーソロジーでは『次元観察子 ψ 3』からの概念を理解することによって「エーテル空間」が開けてくると言われている。

これによって「エーテル体」が分かるようになる。

「エーテル体」とは何なのだろうか？

これは19世紀にヘレナ・P・ブラヴァツキーが確立した神智学において出てくる概念で、「物質体とは違った、目に見えない意識エネルギーのようなもの」を「〇〇体」という呼び方をしたものである。

東洋だと「氣」とか「プラーナ」とか呼ばれているものに近いと理解すると分かりやすいと思う。

この概念はルドルフ・シュタイナーも引き継いで使うことになり、シュタイナーが確立した人智学においても「エーテル体」という用語がよく出てくる。特に、ヌーソロジーは『シュタイナー思想とヌーソロジー』という書籍が出ただけあって、シュタイナーの人智学と絡めた説明がよくされている。

[書籍：半田広宣，福田秀樹，大野章『シュタイナー思想とヌーソロジー 物質と精神をつなぐ思考を求めて』(2017) ヒカルランド]

ちなみに、スピリチュアルの界隈だと、こうした「目に見えない意識エネルギーのようなもの」は18世紀の魔術師エリファス・レヴィの提唱した「アストラル・ライト」という用語から、「アストラル」という呼称が使われることもあるのだが・・・

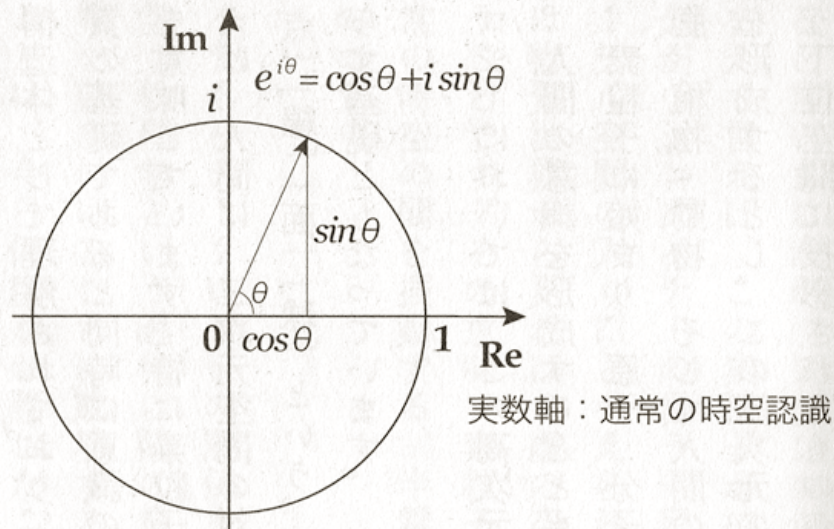
神智学や人智学の文脈だと、ヌーソロジーでまず初めに出てくるものは「エーテル体」とするのが正解なので、その呼び方で統一する。

■ 意識の反転とエーテル空間

ヌーソロジーでは「意識の反転」の先には「エーテル界」があるとも言われている。

書籍『シュタイナー思想とヌーソロジー』でも以下のように書かれている。

虚数軸：エーテル界



- ・ 素粒子の挙動を表す波動方程式はオイラーの公式を基礎に持つ
- ・ このオイラーの公式の虚数部分がエーテル界、実数部分が通常の時空認識の形成を表すと思われる。つまり、波動関数で表わされる素粒子は、高次空間の入り口であるエーテル界と、通常の時空認識の間を振動する、物質と知覚の基礎となる、半霊半物質の存在と思われる
- ・ 光子においては、この虚数軸が視覚における「モノ」と「背景の」の一体化を表し、実数が「モノ」と背景の分離状態を表している

この図はオイラーの公式とエーテル界の関係についてであり、「虚数軸：エーテル界」と書かれている。さらには素粒子の挙動を表す波動方程式はオイラーの公式を基礎に持つということで、素粒子との関係についても書かれていて、「オイラーの公式の虚数部分がエーテル界、実数部分が通常の時空認識の形成を表す」と書かれている。

ここにある「虚数軸」は「奥行きの軸」と同義でもあるし、『人間の外面』や「前」の方向とも同義である。

そもそも、書籍『シュタイナー思想とニューソロジー』では、シュタイナーが目指す意識進化の道と、ニューソロジーが目指す意識進化の道は通じているのではないかと、シュタイナー思想とニューソロジーについてのすり合わせが行われていた。

したがって、シュタイナーの人智学の入門の際に出てくる概念の「エーテル体」も、ニューソロジーの概念と一致してくるわけである。

さらには、ニューソロジーでは「素粒子の正体は意識である」という世界観の通り、「エーテル体は素粒子である」といったことまで言われているので、素粒子の構造からエーテル空間の仕組みを明らかにすることまで目指している。

■ シュタイナー思想におけるエーテル体

さて、シュタイナーがエーテル体についてどのように説明したかを軽く見てみよう。

書籍『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』から引用する。

人間のエーテル体の各部分はたえず活動している。無数の流れがエーテル体をあらゆる方向へ導いている。人体はこのような流れを通して、その生命活動を保持し、制禦しているのである。すべての生物はこのようなエーテル体を持っている。植物、動物もエーテル体を持っている。それどころか鉱物にも、注意深く観察すれば、エーテル体の痕跡が認められる。

エーテル体は人間が持っているものでありながら、いたるところにあると書かれている。そして、シュタイナー思想においては、エーテル体は意識進化のために開発するものなため、瞑想や集中を用いて、宇宙の法則と調和していくように扱っていく。

神秘道を修行していくと、人間世界の進化と法則に対して調和的な在り方を示す流れや動きを自分のエーテル体にもたらしようになる。行法は常に世界進化の偉大な法則のエーテル体の行模像であるように考えられている。前にふれた瞑想（メディテーション）と集中（コンセントレーション）はまさにそのような行であり、これが正しく実践されるなら、今述べたような結果をもたらしてくれるであろう。

なんとなく目指していくべき方向性が分かるだろうか？

シュタイナーはこうした神秘的修行を含んだ学問に挑む者を「神秘学徒」と呼び、神秘学徒について以下のように書いている。

神秘学徒は毎日、わずかの時間でもよいから、日々の仕事とはまったく異なる事柄のために費す時間を確保しなければならない。時を費す仕方もまた、日常の他の場合とはまったく異なっていなければならない。とはいえこの特別の時間が対象とすべき事柄と日々の仕事の内容との間にまったく何の関係もないかのように考えるべきではない。反対である。正しい仕方でのこの特別の時間を費す人は、やがてこの時間の中から、日々の課題のための充実した力が受け取れることに気づくであろう。

もしこの規則のために費すべき時間が本当にもてないというのなら、毎日五分間だけで十分である。むしろどのようにこの五分間を使用するかが大事なのである。この時間の中で、人は完全に自己を日常生活から隔離する。思考と感情のいとなみは日常の時間における場合とは異なる色合をもたねばならない。

ここに書かれていることは、『変換人型ゲシュタルト論』に出てくる構造のイメージを修行やトレーニングのノリでやっていくためにも適した心構えだと思う。

書籍『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』は、シュタイナーが出したもののなかで一冊は持っておいた方がよい本だと思う。

もはやニューソロジーの学習と一緒に読んだ方が良いのでは？と思えるバイブルのようなものなので、特にオススメである。

〔書籍：ルドルフ・シュタイナー『いかにして超感覚的世界の認識を獲得するか』（2001）筑摩書房〕

以上。「エーテル体」と「ニューソロジーの反転」の関係について書いていった。

ニューソロジー外の分野で「エーテル体」の扱いについて学んでいる人は「ニューソロジーの反転」が理解しやすいかもしれないし、

「ニューソロジーの反転」が分かった人はニューソロジー外の分野で「エーテル体」を扱うことができるかもしれない。

そうすると、色んな応用が考えられるのでは？と思う。

そして、次元観察子 ψ_3 は、まだ「エーテル体の糸口を掴んだ」ぐらいの段階になり、そこにどっぴりと入り込むのは次元観察子 ψ_5 から・・・という話になるので、引き続き『変換人型ゲシュタルト論』を進めていこう。

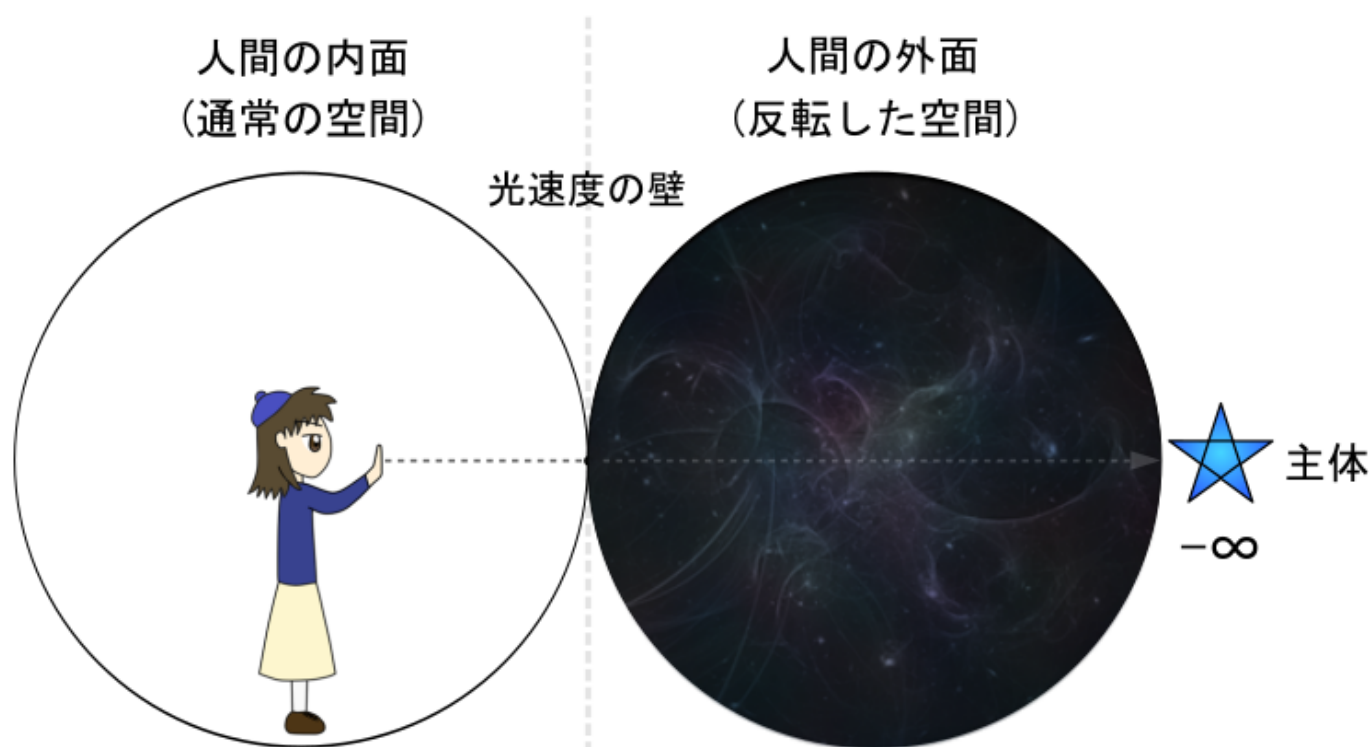
32. 火のイメージを応用する

前回は「夢の世界」や「エーテル体」など、抽象的なイメージベースの話をしてきた。

今回の話は Raimu オリジナルの手法である。

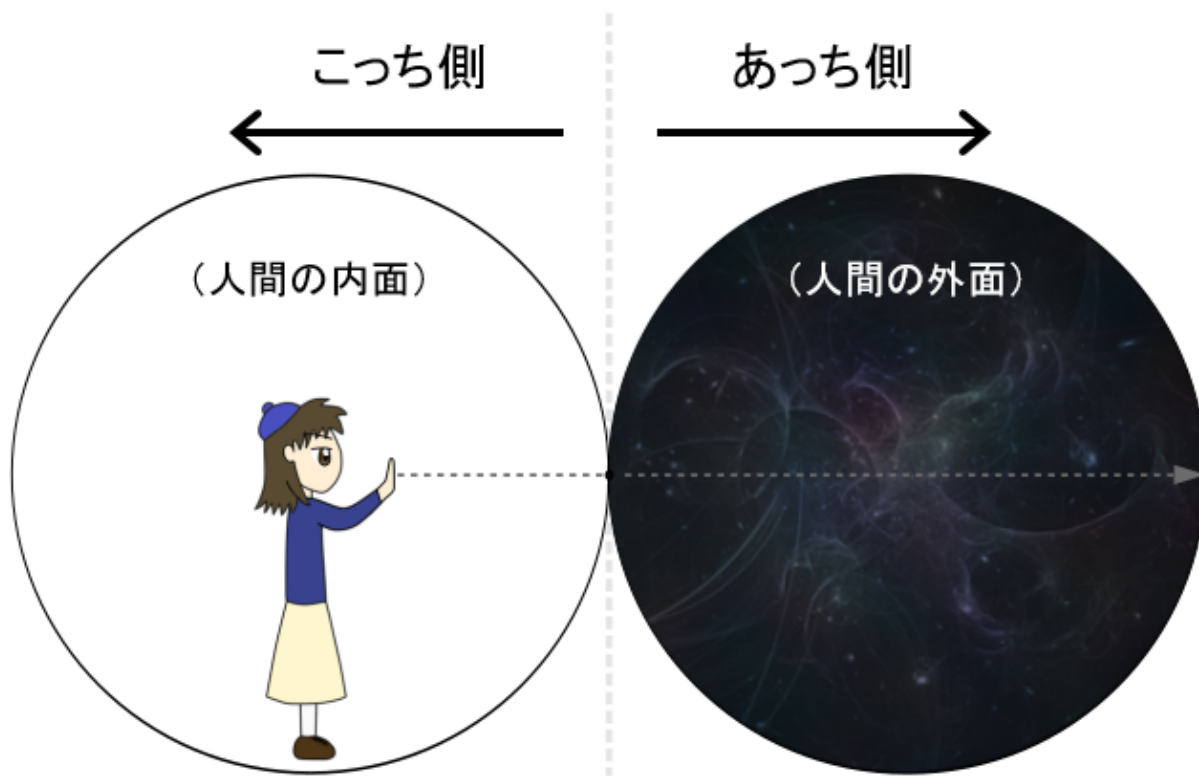
これまでのヌーソロジーについてをおさらいしよう。

前方向に『人間の外面』と「反転した空間」があり、後ろ方向に『人間の内面』と「通常の空間」がある・・・という話だった。



また、上記のイメージは光速度イメージと重ねることもできて、光速度を突破すると『人間の外面』側へ、その手前だと『人間の内面』側の世界となる。

『人間の内面』側を「こっち側」、
『人間の外面』側を「あっち側」としよう。



そして、「こっち側」と「あっち側」は、
四大元素論だと「**地のエレメント**」と「**火のエレメント**」の関係になっている・・・と解釈することができる。

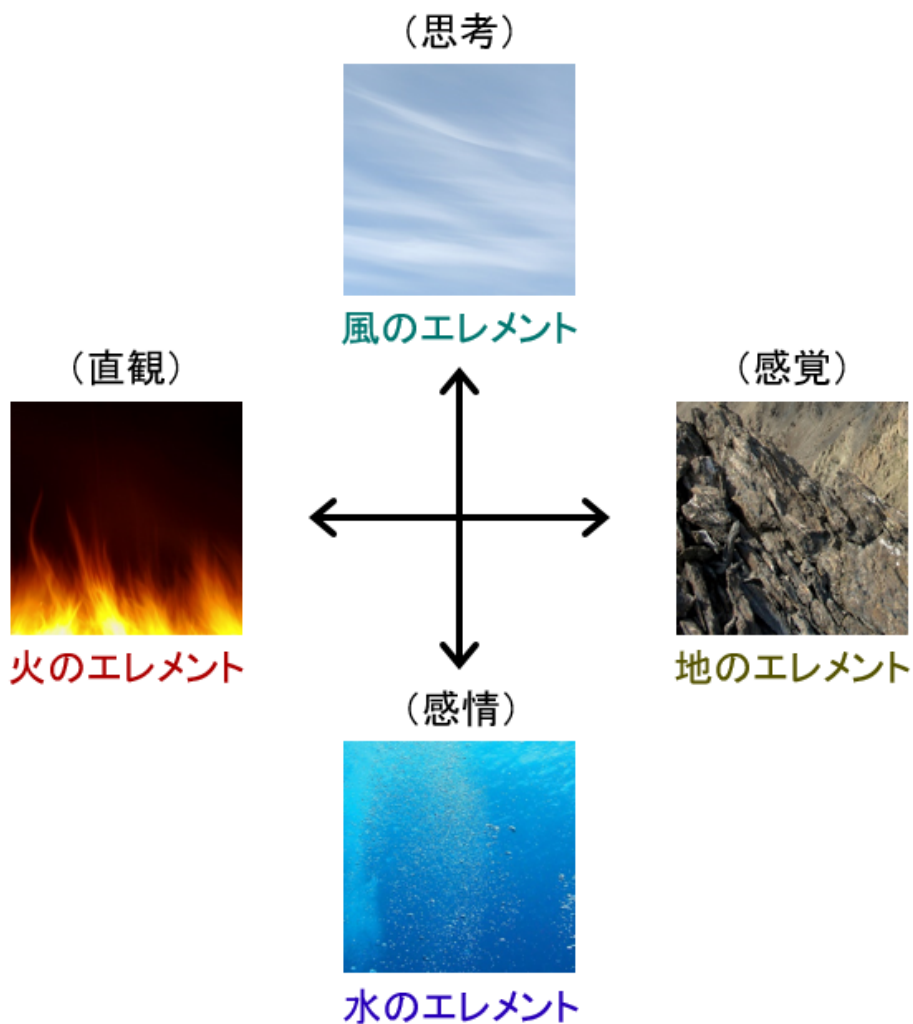


ここで言う「**地と火**」は概念的なものの話である。

まず、西洋で古代から伝えられている四大元素論は「**火地風水**」で構成されている。

それぞれの元素は「**直観**・**感覚**・**思考**・**感情**」を司ると言われていて、

「**火と地**」が対の関係、「**風と水**」が対の関係になっている。



また、ケイブコンパスにおいても、『偶数系の元止揚』は「**地のエレメント**」、『奇数系の元止揚』は「**火のエレメント**」に対応し、『思形』は「**風のエレメント**」、『感性』は「**水のエレメント**」に対応していると解釈することができる。



なぜなら、『偶数系の元止揚』が持つ要素は「物質世界・他者側・幅・感覚や経験・直線的な時間・四次元時空のゲシュタルト」であり、**地**の物質的な方向性がそれと関係してくる。

一方で、『奇数系の元止揚』が持つ要素は「精神世界・自己側・奥行き・直観・持続的な時間・四次元空間のゲシュタルト」であり、**火**の精神的な方向性がそれと関係してくる。

また、**風**は思考を司るので『思形』が関係し、**水**は感情を司るので『感性』が関係してくる。

ニューソロジーと四大元素論の関係については、以前にもブログでまとめたことがある。

[リンク：ニューソロジーと四大元素論（火・地・風・水）の関係について その1]

それから、四大元素論的に**火のエレメント**が表すものは、

生命力、純粹さ、情熱、闘志、芸術、流動性、能動性、破壊と創造・・・といったものである。

それらを扱う感覚は「直観」でもあるため、

火のエレメントが強い性格は「直観タイプ」とも言われる。

ニューソロジーで脱却する「人間型ゲシュタルト」は、いわば「安定をもたらす世界」でもあるため、

それを脱却する強いエネルギーとなると、不安定さに向かってそれを制するような**火のエレメント**の力ということになるのではないだろうか？

以上のように『奇数系の元止揚』と「**火のエレメント**」の二つの概念は、絡めて理解すると良いと思う。

■ 火のイメージの応用

そんなわけで、火のイメージを使ってヌーソロジーの概念を理解してみよう。



前回「エーテル体」の説明をしたが、
ここで使う「火」のイメージはそれとも近いと思う。

また、抽象的な「火」のイメージはスピリチュアル的に重要と言える事例がある。

前回、神智学の創始者として名前を挙げたヘレナ・P・ブラヴァツキーは、
「エーテル体」という言葉を使った先駆者でありながら、
19世紀の時代にアメリカのスピリチュアルのベースを作った人物でもあるので、
現代スピリチュアルのルーツにもなっている。

そんなヘレナ・P・ブラヴァツキーが代表書籍として残した『シークレット・ドクトリン』では、
「火」を重要とする記述がある。

[書籍：H・P・ブラヴァツキー『シークレット・ドクトリン 宇宙発生論《上》』（2013）宇宙パブリッシング]

神秘学は“唯一の实在”を次のように概括する。神は神秘的な生きている（または動いている）火であって、この見えない実存の永遠の証人達は光と熱と湿気である。この三者は自然界のあらゆる現象を包含しており、またその原因である。宇宙内運動（intra-cosmic motion）は永遠であって止まることはない。

現代スピリチュアルの発端のような立場の者が残した本の一節にこうしたことが書かれているのはとても重要なことだと思う。

俗物的なスピリチュアルの場合は、「直観」よりも「感情」の方が大事とされることもあり、むしろ「水のエレメント」みたいなイメージのものも多くあるが、元祖スピリチュアルのような神智学ではやはり「火のエレメント」みたいなイメージの方が重要なわけである。

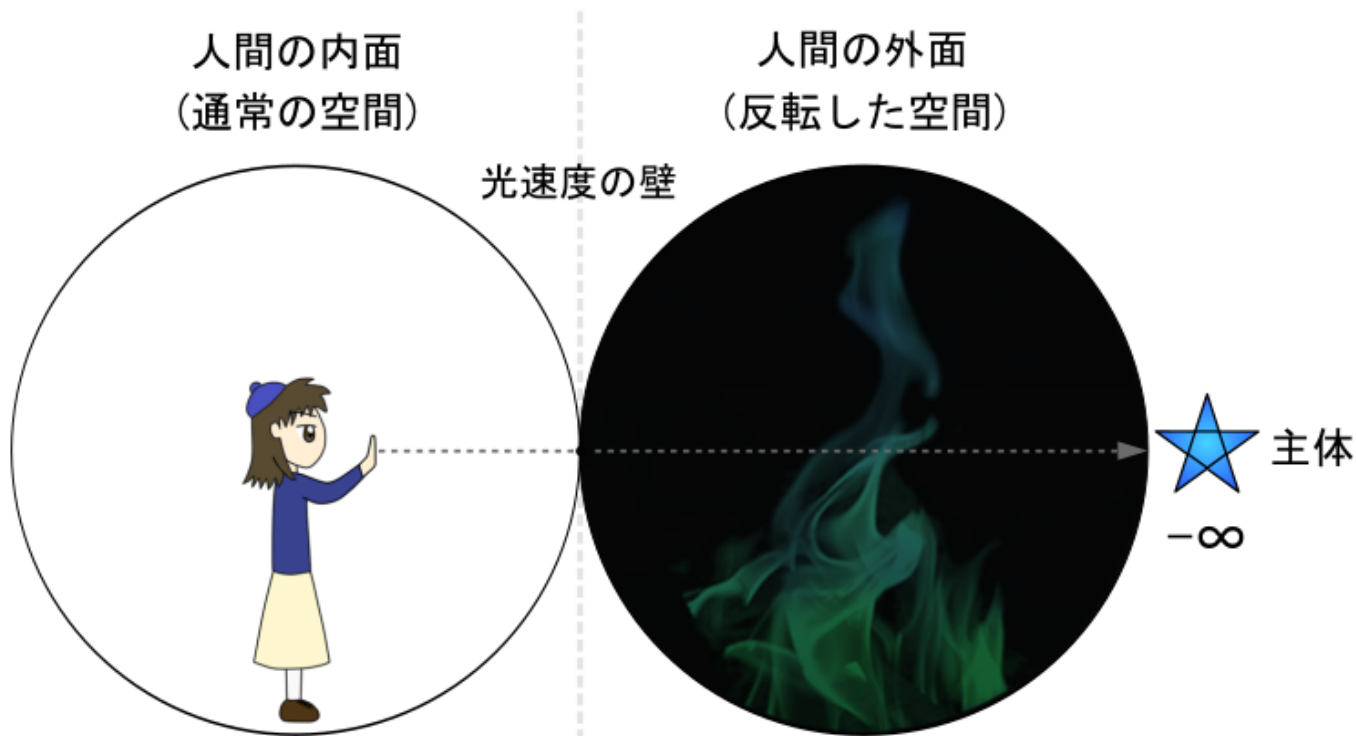
■ 火のイメージと反転

さて、火のイメージをヌーソロジーの反転のイメージと絡めてみよう。

色は何でも良いけど、安易な「赤」よりも、シリウスやオリオンを表す「緑」や「青」のが良いかもしれない。



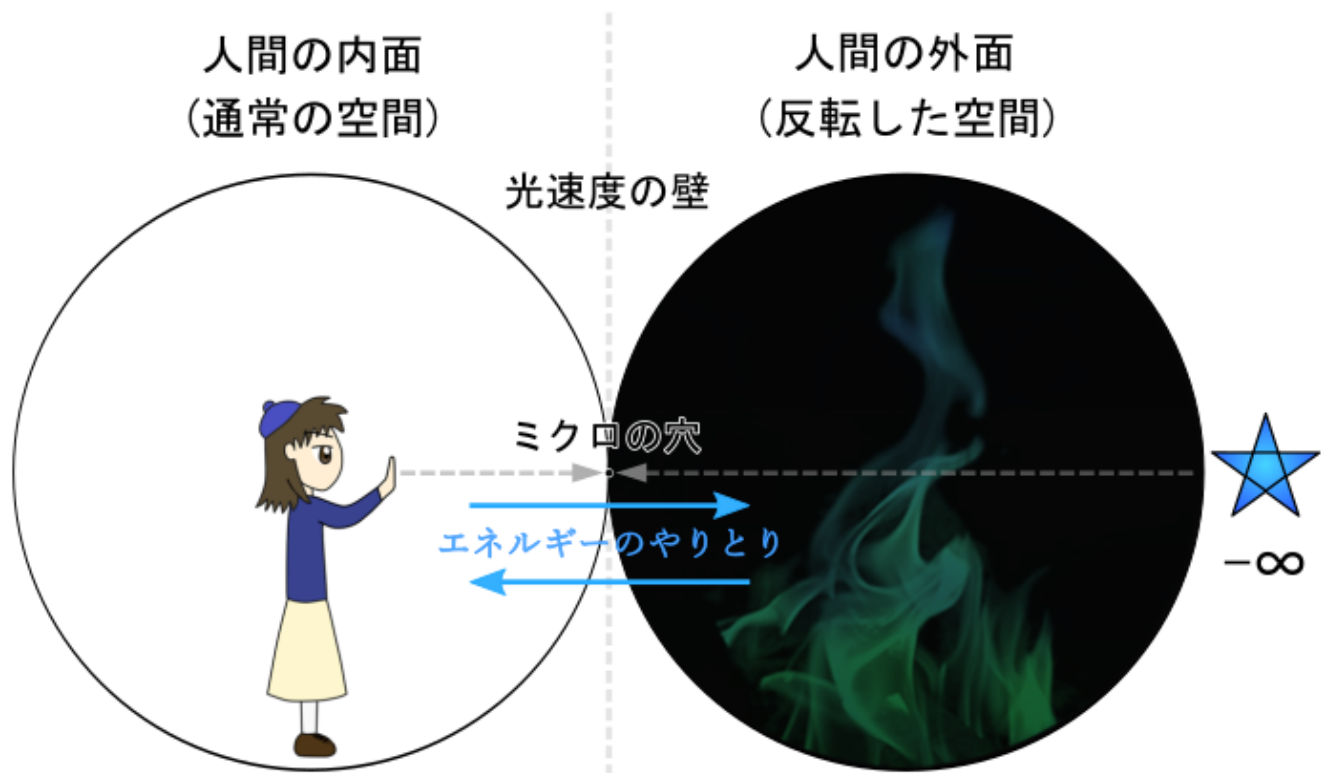
「反転」と『人間の外面』を意識した時、その先にはそんなイメージのものがあるかもしれない。



さらに、それは反転のイメージと同様に、目の前のイメージと重なってくるかもしれない。



ヌーソロジー的には「あっち側」と「こっち側」の境界はどうなっているかというと、「光速度に達した時の点」のように、ものすごく微小な大きさの点のようになっている。したがって、その先の世界に繋がるには、まるで針の穴に糸を通すような感覚になってくる。



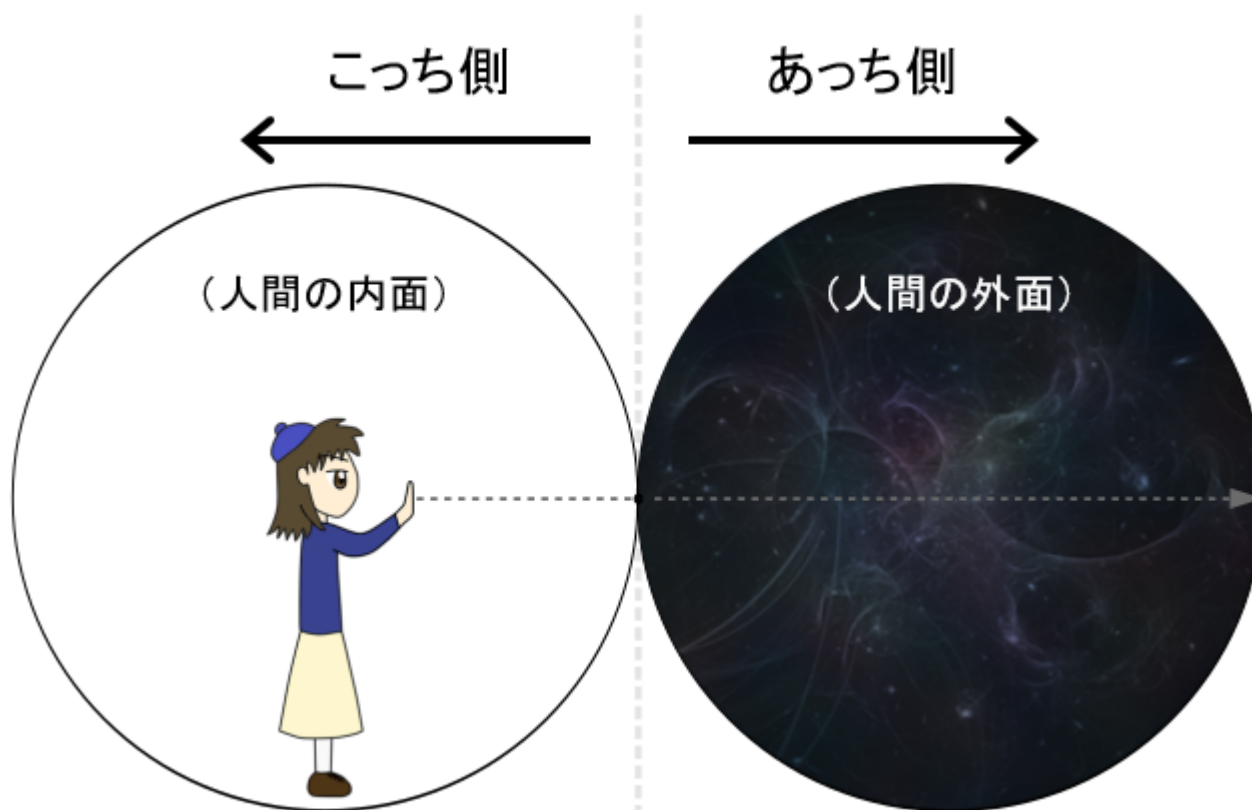
そんな感じで「あっち側」にある「火のイメージ」を、
 針の穴に糸を通すような感じで・・・それも素粒子のような大きさの穴に対して、
 「こっち側」に通るようにやってみる。

また、「こっち側」のエネルギーを「あっち側」に通すこともできるので、やってみる。

そんな感じで「あっち側」とのやり取りができるようになると、
 ヌーソロジー的に分かってくることがあるのではないか？と思う。

33. 非物質世界の知覚と霊能者について

前回、「火のイメージ」についての話をしつつ、「あっち側」と「こっち側」の話をした。



「こっち側」は普通に物質の世界で、
「あっち側」は通常の物質ではない見えない存在がメインの世界である。
つまり、それは「**非物質の世界**」と言うこともできる。

俗っぽい言い方をすると「**霊界**」ってことになるんだろうか？

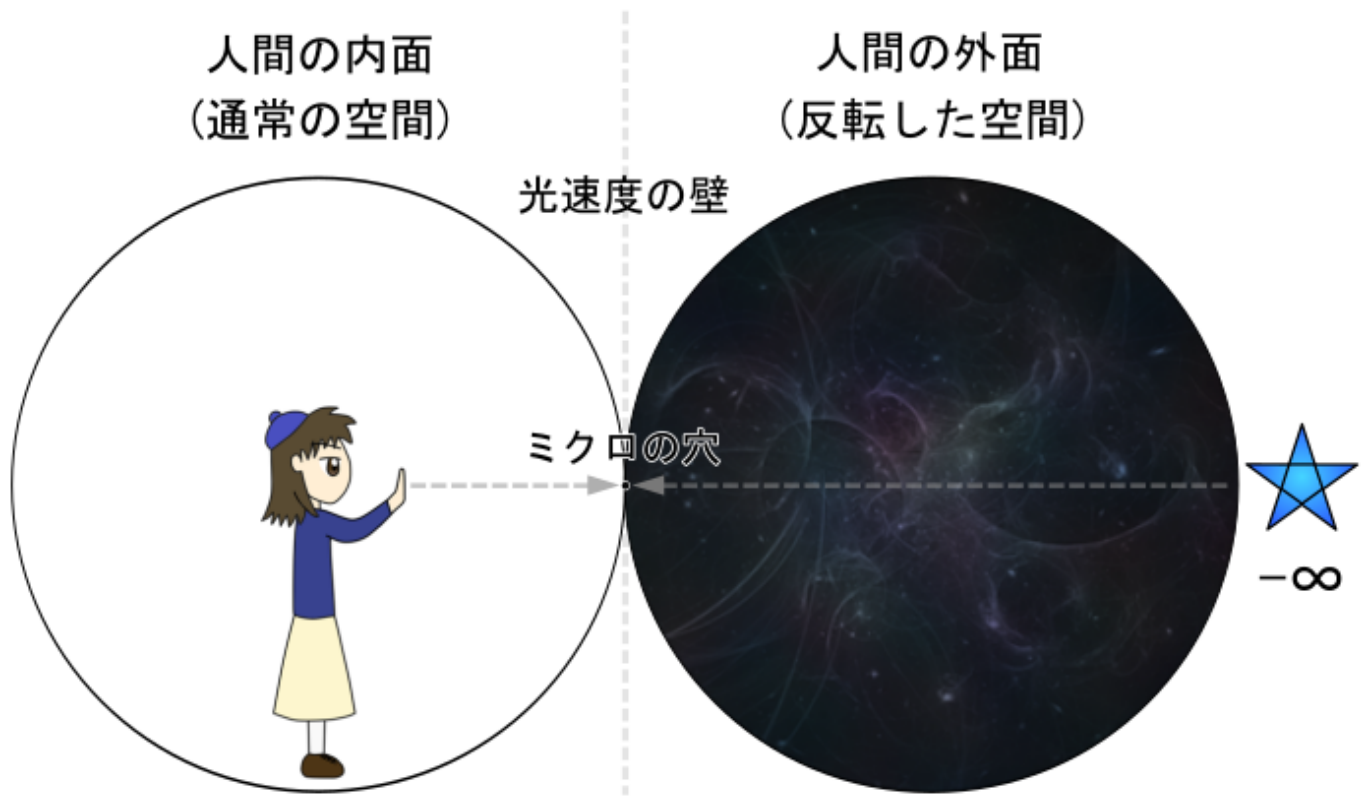
「霊界」となると人が作ったイメージも混ざるのでなんとも言いづらいけど・・・

なににせよ、普通の人間が知覚できない思念や意識があるかもしれない世界がそこにあるわけである。

■ 「あっち側」とのアクセス方法

ニューロロジー的に「あっち側」にアクセスする方法は、
何度も書いている通り「**反転**」である。

そして、「反転した空間」と「普通の空間」の境目はミクロの大きさの点のようになっている。
そのため、前回説明した通り「針の穴に糸を通す」ようにそれを行う。



そんな感じのイメージができるだろうか？

そして、それをさらに応用すると、

「人間でないもの」と意識をつなげて交信みたいなこともできる。

例えば、南米ペルー・アマゾンのシピボ族のシャーマンの間では、

「特定の植物の精霊と契約を結び、植物の意識に繋がること」を「**ディエタ**」と呼ぶ。

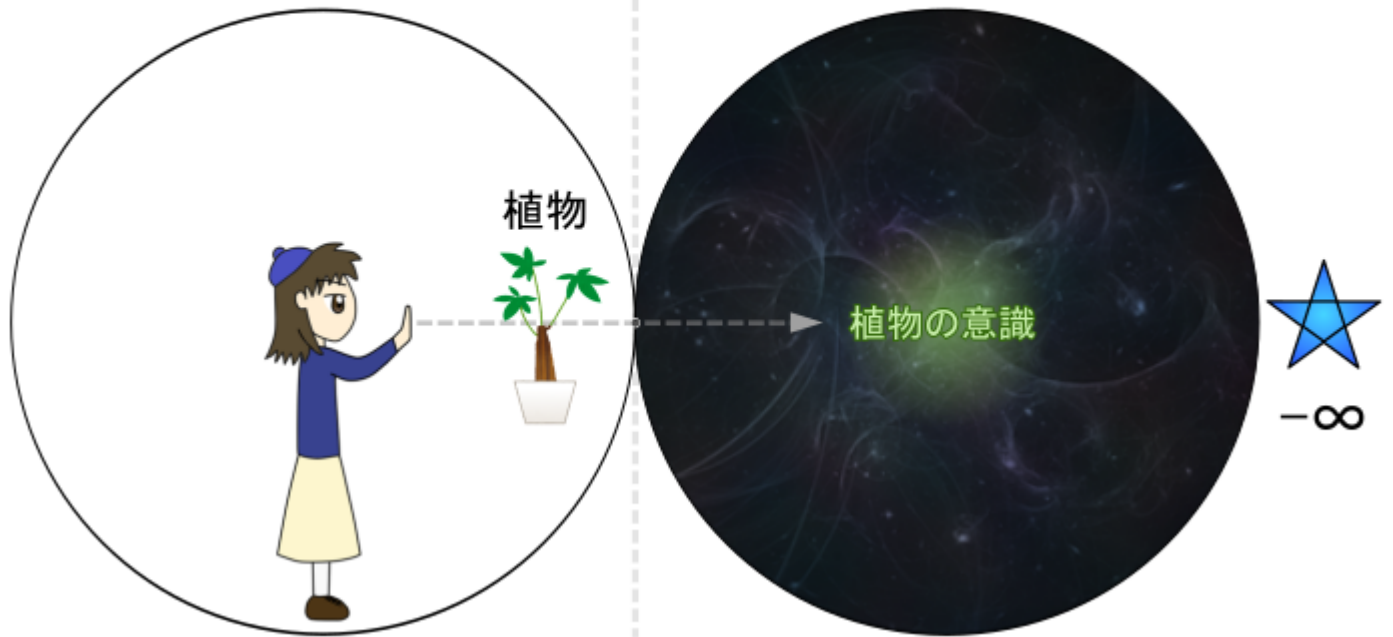
これは植物療法やヒーリングに繋がる高度な伝統技術なため、とても奥が深いものだが・・・
要するに、そんな感じのノリで植物との交信が可能とされている。

[リンク：シャーマン修行：ディエタとは | NATIVE SOON]

そんなノリと「反転」の要領によって、植物の意識と繋がることは可能だろうか？

人間の内面
(通常の空間)

人間の外面
(反転した空間)



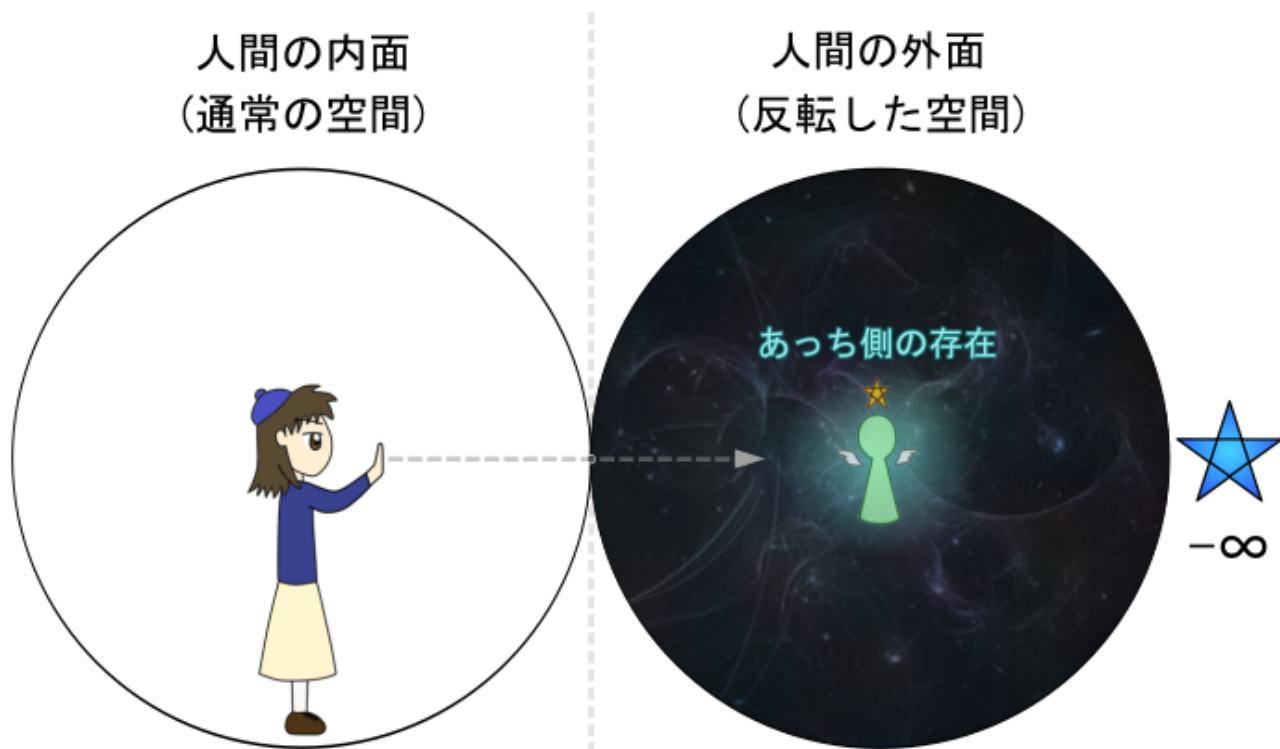
植物相手であれば概ね安全と言えるので、チャレンジしてみるのも良いかもしれない。

■ 非物質存在との交流

「あっち側」へアクセスする能力をもっと応用すると、「あっち側」の「人間でないもの」との交流が可能になる。

それがより具体的になると・・・「チャネリング」になるわけである。

特にニューロロジーは確実に「主体」や「自己」と繋がることのできる手段なので、それらに紐づいた存在と繋がるのが容易になる。



一部の界隈で「タルパ」というものが流行っていて、
『サイキックと研究と分析』シリーズでそれについて書いたことがある。
「タルパ」とは「人工精霊」とも呼ばれるもので、
自身の中で自動的に動く人格みたいなものであり、人為的に作り出すこともできる。
2chのスレッドで始まり、[タルパWiki](#)があり、それを見てやろうとする人がいるのでネットで流行っている。

[リンク：■サイキックの研究と分析(28) ～サイキックとタルパについて～]

それから、以前にブログで「ホ・オポノポノ」についてを書いた。
これはハワイのシャーマンの伝統を基にしたスピリチュアルな実践技法である。
自己探求法・問題解決法として様々な効力を発揮するものでもあるが、
その中で「ウニヒピリ」と呼ばれるインナーチャイルドのようなものと交流したりもする。

[リンク：《内なる子供》と仲良くなる「ホ・オポノポノ」入門]

ちなみに自分 (Raimu) は、具体的なチャネリングをすることはできないが、
これらのことを利用して、自己の中にある「あっち側」の存在を漠然と感じたり、
第六感を高めることはしている。

チャネリングというほどではないけど近いことをする能力・・・

自分はこれを**ニアチャネリング能力**と呼んでいる。

スピリチュアルやシャーマニズムとしてニューソロジーを突き詰めていくと、そんな能力とも関わってくるようになると思う。

自分的なニアチャネリング能力によると、

シューマン派発生装置を使うと、とても調子が出るように感じる。

これは強力でコストパフォーマンスが良く、浄化効果もあってオススメなので色んな人に薦めたい。

[リンク：「シューマン波発生装置」のコスパが良いのでオススメできる]

■ 「他者」の意識との予期せぬアクセス

さて、自身より外部（あっち側）の意識に繋がる話だと、最近では「HSP」とか「エンパス」みたいなものもよく聞く。

HSPは、生まれつき非常に感受性が強く敏感な気質もった人で「*Highly Sensitive Person*（ハイリー・センシティブ・パーソン）」の略である。

気疲れしやすく、メンタルが不安定になりやすい気質だともされ、「繊細過ぎて生きるのが大変な人」みたいな意味で使われることが多い。

エンパスは「共感力、共感力の高い人」という意味である。

並外れた共感力を持っていると、一見するとちょっと離れた位置にいる人でも「相手の感情が、自分の感情のように感じられてしまう」ことが強く起きてしまう。

普通は五感を通じてそうした感情を連想するものだが、エンパスの人は第六感に通じるレベルでそれが起きるので、非常に強く感じてしまう。

この二つの気質は似ているため、併発するように発生する。

「とにかく心が繊細過ぎる人」がこれらに当てはまるが、非常に強力な人は外部の意識と繋がってしまうことによって起こるわけである。

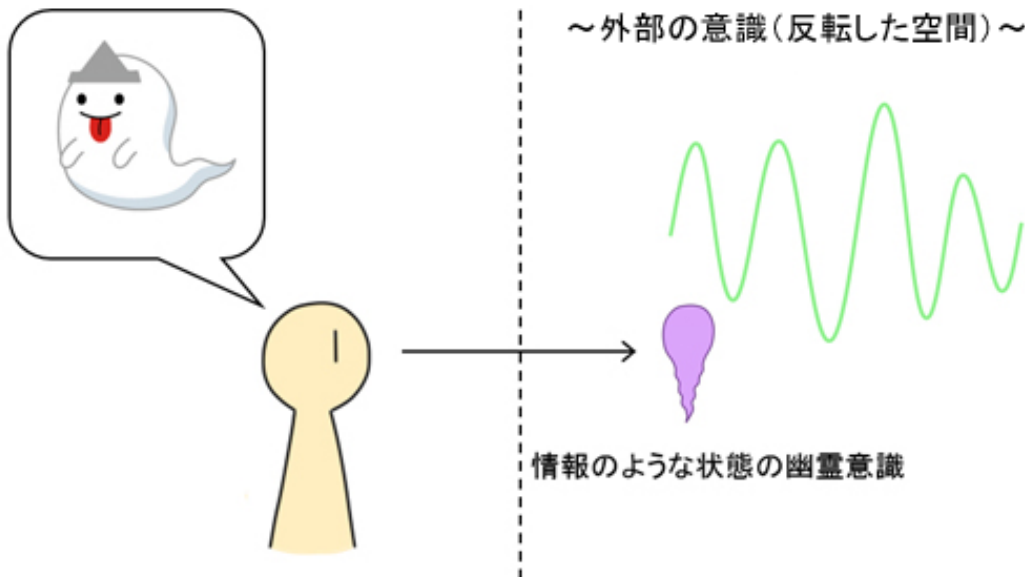
これらはどういう原理で起こっているのだろうか？

恐らく、肉体（あるいは、自身が持っている意識体）に、外部とアクセスする機能を持った「穴」のようなものが空いているのではないだろうか？

ニューソロジーでは、能動的な意識によって「反転の穴」を開けていくが、先天的にそうした穴が開いている人もいるのではないだろうか？

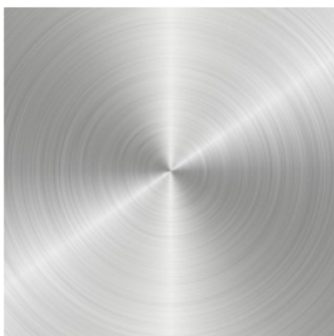
また、これは『サイキックの研究と分析』でも書いたことだが、
いわゆる「幽霊が見える」系の霊視能力者の場合は、
潜在的に感じ取った外部の意識が、自動的にイメージに変換されて目の前に現われてくるのかもしれない。

[リンク：■サイキックの研究と分析(15) ～「波の世界」に意識を飛ばせる～]

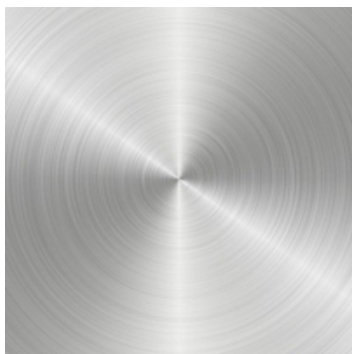


これについては仮説段階だが、そうした理由で起こるのではないだろうか？

こうした靈感や感受性の度合いは、持っている肉体によって異なってくる。
感度が強いほど、自身の意識体がまるで浸透しやすい素材でできているみたいなものになっている。
材質で例えるなら、
鉄、木、スポンジ・・・などでできているようなものである。



感受性の度合いによって、自身の意識体がどのような材質でできているかが異なってくる。



鉄はほぼ全くと言って良いほど影響を受けない。
むしろ共感力が低すぎてサイコパスめいてることもあるかもしれない。



木は強く影響を受けることはないにせよ、多少は受けることもある。
木の柔らかさによっては感性が豊かかもしれないし、固いとそこまでではないかもしれない。
はっきりとした靈感持ちと言える人間は少ないとされるが、それでも大体の人間は何かしらの影響を受けるものなので、木のような材質でできた者が一般的に多いかもしれない。



スポンジはあまりにも影響を受けすぎるような材質と言える。
そこまで脆さだと自他の境界が曖昧になりやすく、ほとんど病的である。

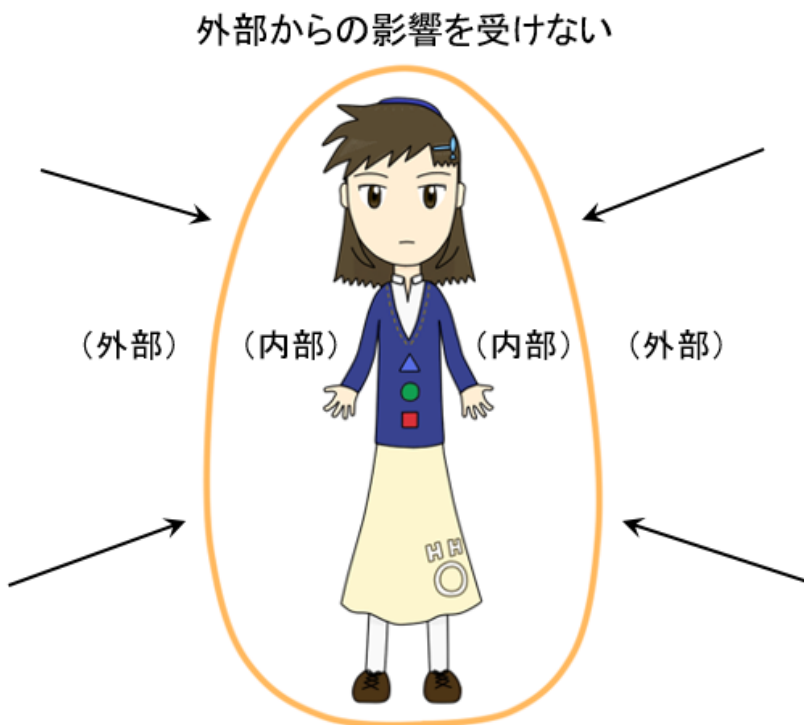
HSP やエンパスといったものについては、
そんな感じで捉えてみると理解が進むかもしれない。

■ 「あっち側」とアクセスしないモード

ニューロロジー的に「あっち側」にアクセスする方法は「反転」だとして書いたが、逆にアクセスしない場合はどうするのか？

「あっち側」の意識は「奥行き」や「ミクロ」にあるので、
「こっち側」はその逆で「手前方向にいる自分」や「マクロ」にある。

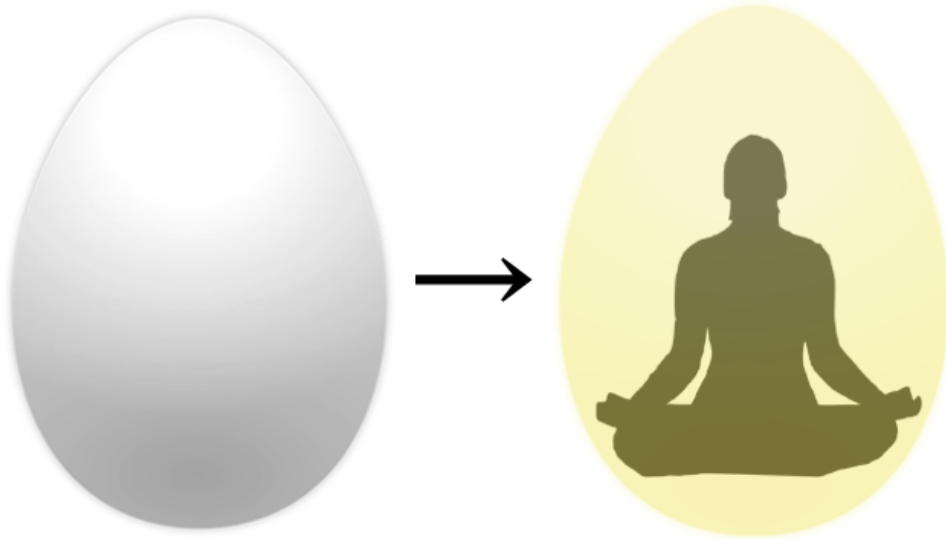
以下のような「マクロ意識のポーズ」の時は、
外部の意識を寄せつけないようにするのが正解だと思う。



つつい感じたくなることもあるかもしれないが、
周りが雑多な状況の場合は、なるべく影響を受けない方が良い。

他者の意識の影響を受けやすい肉体を持っている場合は、
浸透しやすさの原因となってる「穴」を埋めないといけない。

スピリチュアル的なテクニックで、
卵上のオーラをイメージすると、外部の意識を防ぐバリアーを張ることができるので、
他者の意識の影響をあまりにも受けやすい人はそうしたイメージを練習するのもオススメである。



このように「あっち側とアクセスしないモード」も必要なため、
ニューソロジー的には「アクセス用の穴は能動的に空けること」と「あっち側とこっち側のメリハリ」が大事になってくると思う。

HSP やエンパスの対策の参考になるだろうか？

■ 霊能者とは何か？

霊視能力とか霊を扱う能力とか・・・

俗に「霊能力」と呼ばれるものについてはいまだに謎が多い。

これも意識体に「穴」のようなものが空いている人、ということになるのだろうか？

先天性の霊能力者は徳の高い人が自ら能力を得ていることもあれば、
遺伝性の病気や障害の類で力を持ってしまうこともあるらしい。

それから『冥王星のオコット』は、霊や超能力者に関してあんまり明るい見解は持ってないみたいである。

以下、シリウス・ファイルに書かれている実際の交信記録を引用する。

— 霊についてももう少し教えていただけますか。

人間の意識が方向を持つときに生み出した精神のカタチに關与されたオリオンとの交差の全く逆のカタチを持つ変化層。

— 超能力者とは。

進化の方向が定質に反映されていない。等化が生み出されていないカタチのない次元を交差する力を持つ人間のこと。精神の変換ではなく意識の変換しています。人間が人間の内面（意識に反映されたもの）を等化するというのは位置が核質化してしまうということです。付帯質に変換されて人間が見えな

い次元を透視することができます。かれらは奇形です。人間が精神における内面（人間の意識と精神）の等化を行う必要があります。

（交信記録 19911010）

『変換人型ゲシュタルト論』をここまで読んだ人ならなんとなく意味が分かるだろうか？
（ちなみに『付帯質』はノス、『精神』はノウスに近い意味として捉えると良い。）

あまり良い意味で言ってなさそうなのは、その能力の扱いの難しさゆえなのかもしれない。

あるいは、生まれつきの霊能力者のように穴が空いていると、
ニューソロジー的な「あっち側」へアクセスするにおいて、受動的になってしまうかもしれない。

そのため、ニューソロジー的にはなるべく能動的に自身に適した量の「穴」を開けるのが良いのだと思う。

そして、あくまでオコツトが目指すものは、
『変換人型ゲシュタルト論』で説明している『等化』の方向性なのである。

34. 次元観察子 ψ_4 の話に入ろう

これまでは『次元観察子 ψ_3 』の話をしてきた。

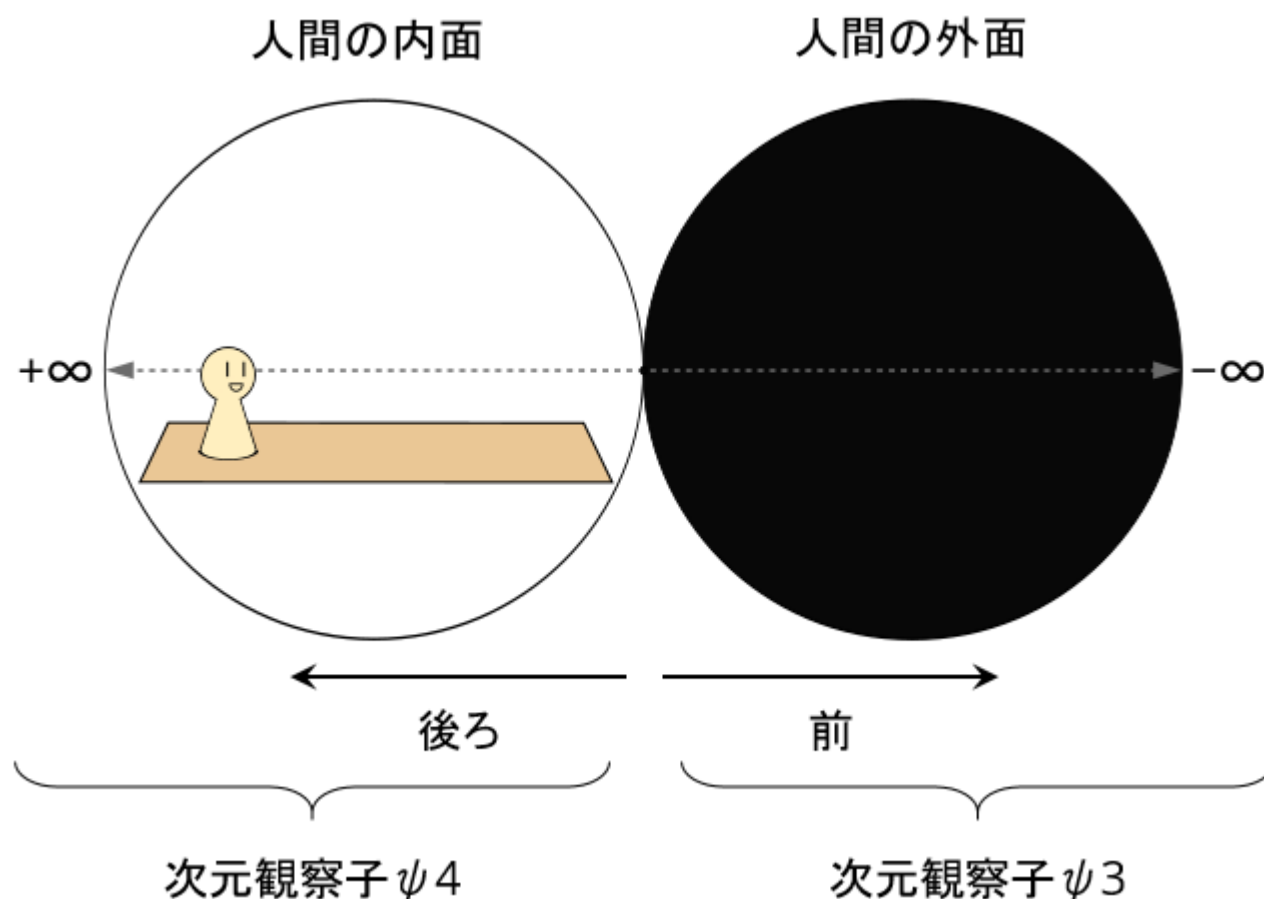
ここからはその次である『次元観察子 ψ_4 』の話をしていこう。

奇数系である次元観察子 ψ_3 については「反転した空間」にあるため抽象的な上に重要なので説明にとっても長い手間をかけたが、

偶数系である次元観察子 ψ_4 は「普通の空間」にあるもので、それよりも説明が容易なため、サクッと説明して進めたい。

以前にも説明したが ψ_3 が「前」にあるものとした上で、

「後ろ」にあるものが ψ_4 である。



また、 ψ_3 と ψ_4 はどちらも「無限遠点」にあるとされている。

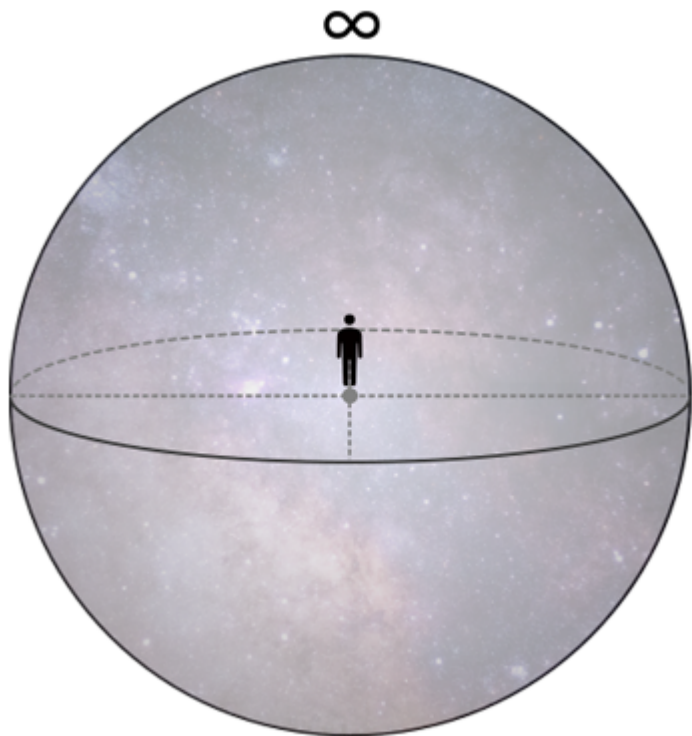
しかし、両者の意味は違う。

ψ_3 側の無限遠点は前方向にあり、「反転した空間」もとい「4次元空間」にあるとされていて、これは「 $-\infty$ 」と表記される。

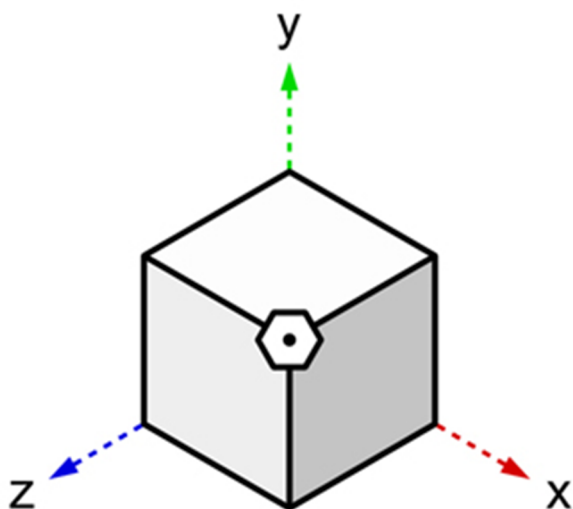
ψ_4 側の無限遠点は後ろ方向にあり、これは「 $+\infty$ 」と表記される。

この意味は ψ_3 側の無限遠点よりも単純で、
「われわれが考える無限の遠さにある点」と同様の意味である。
つまり、とてつもなく遠いようなものである。

これは次元観察子 ψ_2 の「マクロ」が表す「無限」とも近い。



しかし、 ψ_4 と ψ_2 の違いは、『垂子』の線上を意識して
「 ψ_3 の後ろ方向にあるもの」として捉えるかどうかである。



垂子は上記の「4次元を発見するための図」で立方体に垂直に差し込まれる線の方角にある。
そこで「4次元」が発見できた時の「後ろ方向の無限遠点」に『次元観察子 $\psi 4$ 』があると理解しよう。

■ 主体と客体

また、 $\psi 3$ の無限遠点に『主体』があるように、
 $\psi 4$ の無限遠点には『客体』がある。

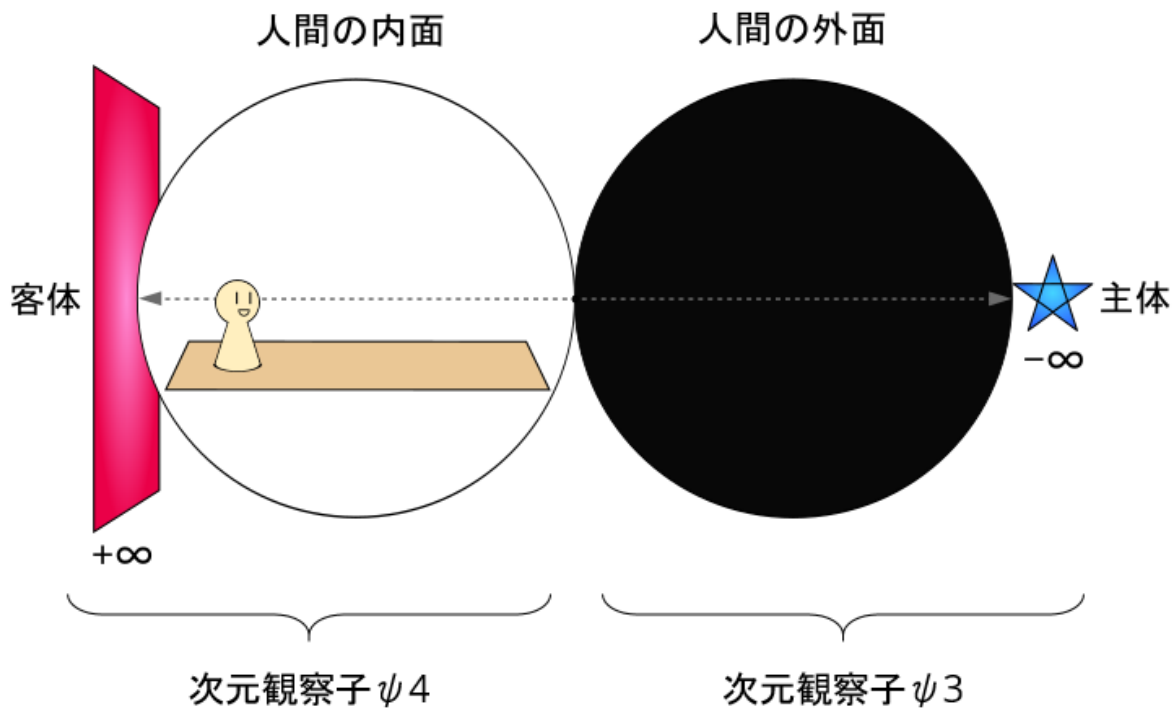
書籍『2013:人類が神を見る日』にも、

「 $\psi 3$ が主体を構成している空間ならば、 $\psi 4$ は客体を構成している空間ということになるのだ」と書かれている。

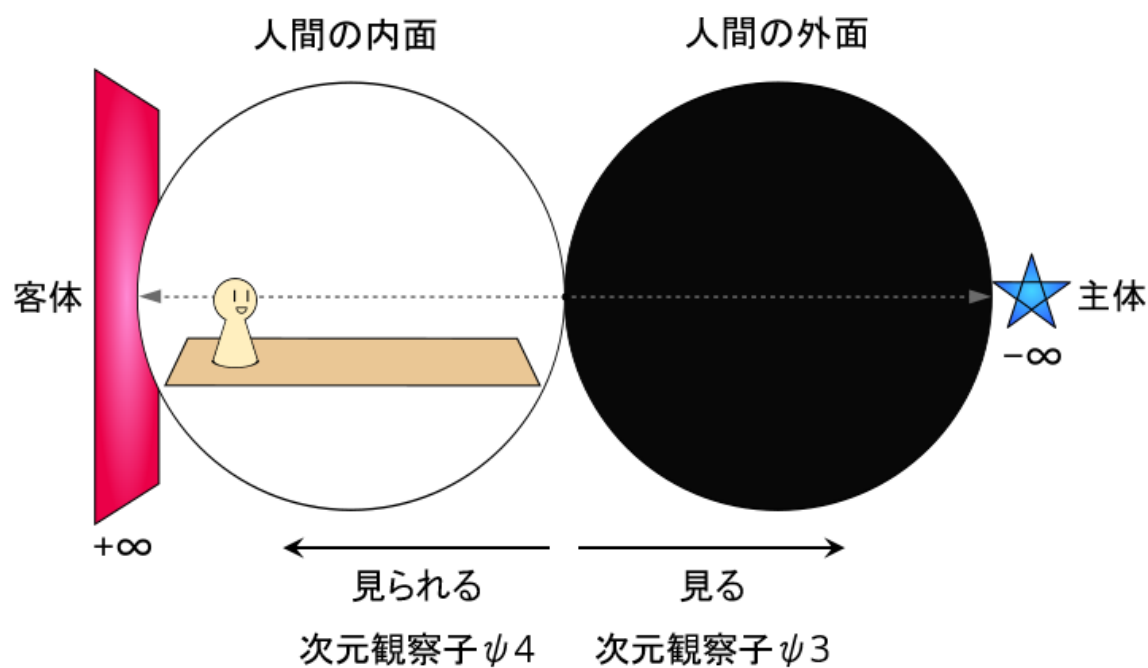
客体を以下のシンボルとして表してみよう。



すると、 $\psi 3 \sim \psi 4$ については以下の図のようになる。



さらに、 ψ_3 は「見る」意識であり、 ψ_4 は「見られる」意識であることが重要である



前側は「見る」、後ろ側は「見られる」の関係になっていることも、ニューソロジーの基本となるので覚えておこう。

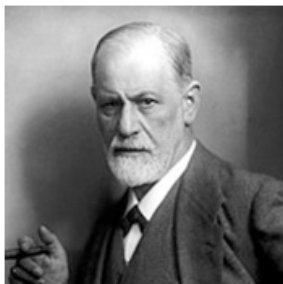
以上の基本を頭に入れれば、次元観察子ψ4についてが分かってくると思う。

35. 「鏡像段階論」について

『次元観察子ψ4』をちゃんと理解するために説明しておきたい話がある。
それはジャック・ラカンの「鏡像段階論」である。

ジャック・ラカンは20世紀に活躍したフランスの精神分析家で、
ジークムント・フロイトを追って無意識を研究し、
フロイトの精神分析学を構造主義的に発展させたパリ・フロイト派のリーダー役となっていたほどの人物
である。

ジークムント・フロイト
(1856～1939年, オーストリア)



ジャック・ラカン
(1901～1981年, フランス)



ラカンの言っていたことはフロイトとは違った独自の理論のようなものになっていて、他に類を見ないほど難解で複雑な内容となっている。

そして、その理論とニューソロジーで言われていることも大まかな一致が見られるため、親和性が高いという
ことでニューソロジーでもよく引用される。

ラカンの理論はコアなマニアには好まれているが、その理論の内容は難解なことでも有名なため非常にムズい。

しかしながら、「鏡像段階論」に関しては割と分かりやすいため、とりあえずそこだけ説明する。

■ 「鏡像段階論」についての説明

以前に『「自己」を見つけるために』の項で、

「普段の我々の意識は、基本的に他者の影響を受けることが多い。」

という話があったのを覚えているだろうか？

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(3) ～「自己」を見つけるために～]

そして、その理由の一つに「幼児から成長する際の意識形成の問題」を挙げた。



これをより詳しく説明している理論がラカンの「鏡像段階論」である。

生まれたばかりの幼児は「自分は人間である」という認知は無いし、記憶や経験が何もないため、自分の身体がどんな感じになっているかすら分からず、統一体のように捉えていない。

そこから少し成長して鏡を見ることによって、鏡に写った自分（鏡像）を見ることではじめて自分の姿を認知して、統一体であることに気付く。



あるいは、鏡を実際に見ない場合でも、お母さんやお父さんなどの「他者からの視線」を気にして、「他者から見た自分の姿」を想像する。

それが「鏡像」となって自分の身体についてが分かっていく。

したがって、鏡像段階論においては、「他者から見た自分の姿＝鏡に写った自分の姿」であり、それが人間の自我形成のベースとなる。

一般的には生後6ヶ月から18ヶ月の間にこの過程があるとされているらしい。

■ 鏡像段階論と次元観察子 ψ_4

さて、以上の説明の中で鏡に写されている光景を「鏡面」と呼んだ場合、「他者から見た知覚正面」とそれは重なり、次元観察子 ψ_4 に紐づく「客体」の在り所とも一致してくる。

つまり、そんな「鏡面」にあるのが次元観察子 ψ_4 だということを覚えておこう。逆に「知覚正面」にあるのが次元観察子 ψ_3 だったわけである。

知覚正面
⇒次元観察子 ψ_3



鏡面
⇒次元観察子 ψ_4

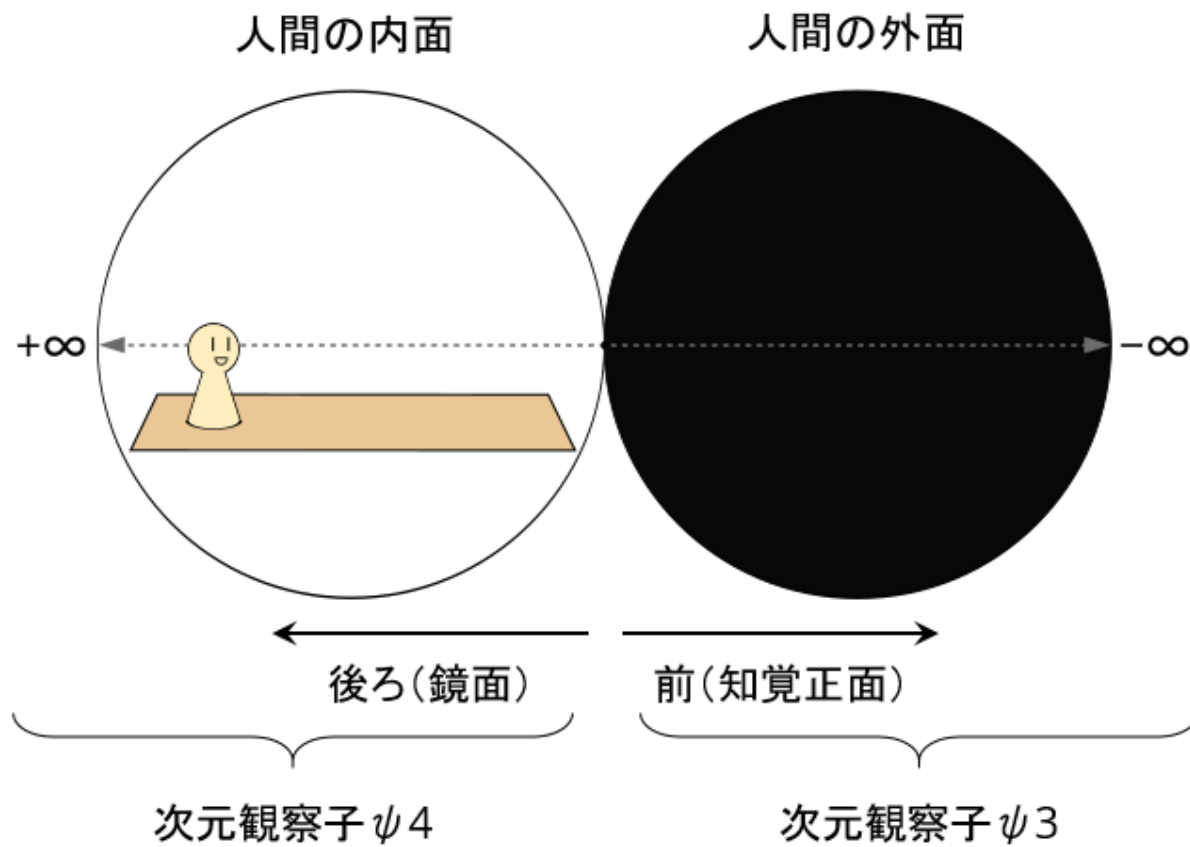


「鏡面」からさらに作られる「鏡像」は、人間の自我のベースになっていて、自我が確立するようになると今度は『次元観察子 ψ_6 』の話になってくるが・・・

とりあえず「鏡面」の段階では次元観察子 ψ_4 だと頭に入れておこう。

また、「知覚正面」と「鏡面」の関係もまた、

「前」と「後ろ」の関係になっている。



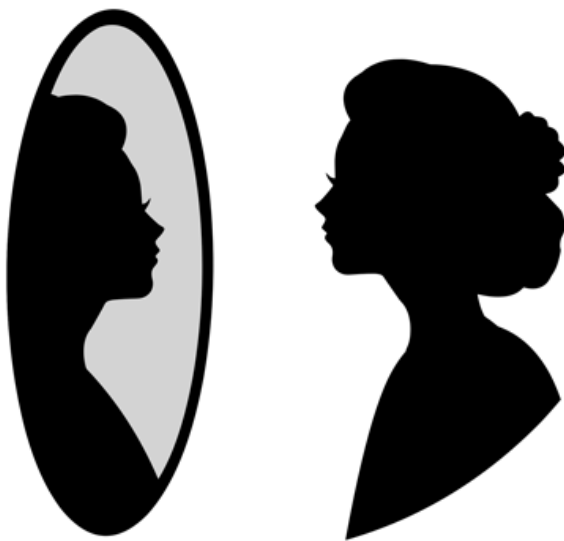
「知覚正面」は変換人型ゲシュタルトの基本だが、
 一方で「鏡面」は人間型ゲシュタルトの基本になる。
 それを覚えておいて欲しい。

36.化粧で理解する次元観察子 $\psi 4$

今回は『次元観察子 $\psi 4$ 』の理解を深めるべく、
実生活との絡めてみよう・・・ということで、
「化粧と次元観察子 $\psi 4$ 」についてを考えてみる。

前回、「鏡面」と次元観察子 $\psi 4$ の関係についてを説明した。

日常生活において鏡を意識するシーンは色々あるだろうが・・・
一番よく意識する行為は・・・「化粧」なのではないだろうか？



主に大人の女性がよくするもので、毎日人と会う場合は毎日やらないといけないこともあると思う。

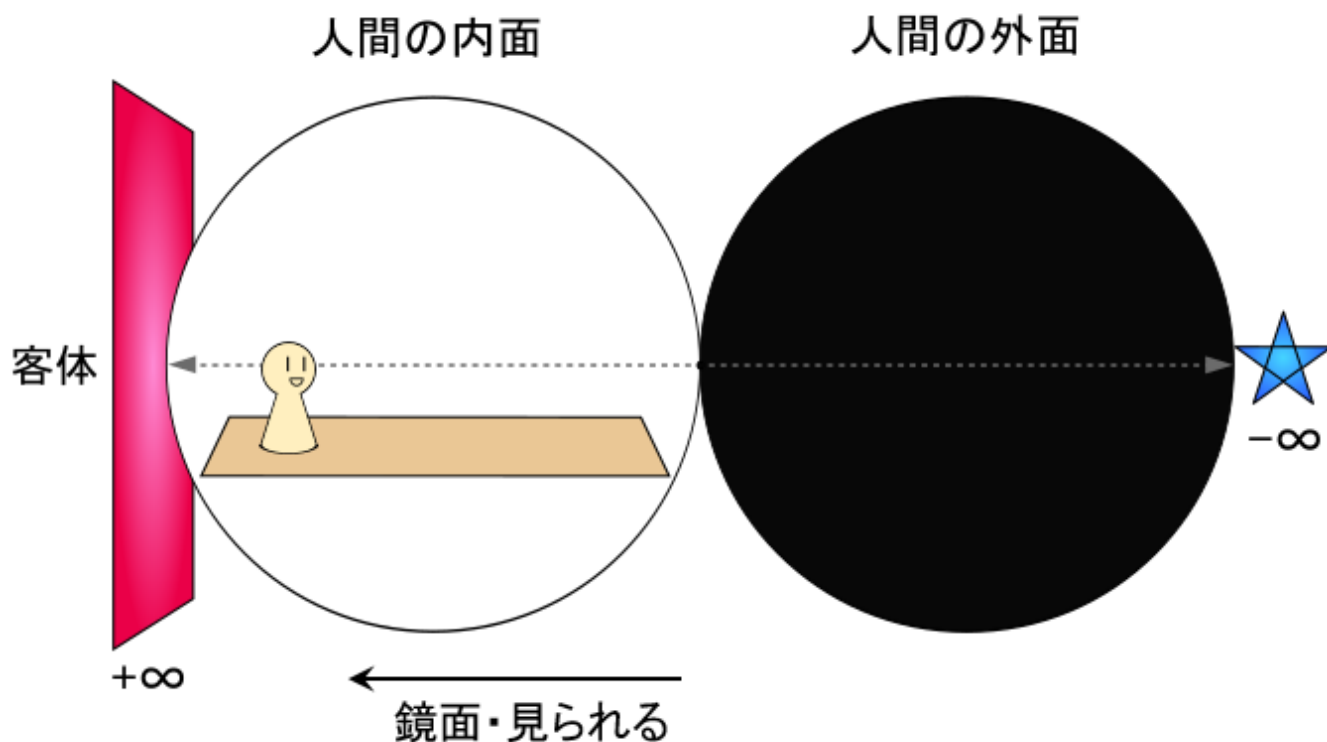
筆者（Raimu）はれっきとした男性なので、日常的に化粧をするわけではないということでちょっと疎いが、これに関して考察してみると良いと思う。

■ 化粧と次元観察子 $\psi 4$ の接点

化粧と次元観察子 $\psi 4$ はどう繋がっているのか？

簡潔に書くと「鏡面をよく眺める行為だから」であり、
鏡面から作り出される意識が次元観察子 $\psi 4$ になるからである。

さらに次元観察子 $\psi 4$ は「見られる」意識の中にあるため、
化粧中に「見られる」ことが強調され、
さらに「綺麗にしようとする」意識まで出てくるようになると、
より一層、次元観察子 $\psi 4$ の意識へと近づいていくことになる。



化粧の意識と次元観察子 ψ_4 はそんな感じで繋がっているのである。
なんとなく分かってきたらどうか？

この問題は男性の場合はぼちぼちで、男性でも化粧まではしないものの、
ヒゲに沿ったり髪を整えたりする時に鏡を見て自分の顔を意識するかもしれない。
ただ、ヒゲに関しては物理的に綺麗にすることを意識すれば良い話であったりする。
髪型に関しては確かにこだわると美意識が必要になってくるが・・・その辺は個々の好みによるもの
もある。

とはいえ、どちらかというとなり女性の方が強いものが「化粧の意識」だと思う。

さらに「全身を整える」のレベルまでいくと、それより上位の『次元観察子 ψ_6 』とかの話になるが、「
とりあえずの見た目」のレベルだと次元観察子 ψ_4 が重要となる。
分かりやすく言うと、インスタやSNSにでも写真だけアップして、パッと見て綺麗ならそれで良い次元が
「鏡面の次元」とも言える ψ_4 の次元ということになる。動画で全身まで載せると ψ_6 の次元になる。

また、化粧と同様の話で、次元観察子 ψ_4 に付随する意識の世界は「なんとなくパッと見て美しいもの」
がもてはやされるものなので、
次元観察子 ψ_4 の意識は「美意識」も絡んでくるものになる。

■ 男女差が出る話

つまり、化粧を日常的に行う女性は次元観察子 $\psi 4$ の意識に没頭しやすい・・・ということになる。

そうなると偶数系（他者側）に陥りやすいことにもなる。

だから男女差が出る話になるのだろうか？

そう。ニューソロジー的に男女のこうした違いは絶対に起きるものなのである。

もっともこれは奥が深い問題であり、一方で女性の『感性』がむしろ奇数系の認識に有利に働くこともある。

男性の場合は『思形』の力によって、別の理由で偶数系に陥りやすいこともあるし、一方で次元観察子 $\psi 3$ 的な意識に没頭することができれば奇数系の認識に有利かもしれない。

化粧に没頭できる美容系男子の場合は・・・『思形』の力と「見られる」の意識が両方とも強いことがあり得るので・・・これはとても偶数系（他者側）に陥りやすいと思う。

それが良いとか悪いとかはとりあえず置いといて・・・

まあ、男だろうと女だろうと、結局は $\psi 3$ 的な意識と $\psi 4$ 的な意識のどっちが強いのか、どういう個性を持っているか次第になる。

このようにニューソロジーと男女論の関係もめちゃくちゃ奥が深く、

次元観察子 $\psi 3$ と次元観察子 $\psi 4$ においても早速こうした男女差の問題が出てくる。

観察子と男女の関係をつきつめるともっと奥が深い・・・話が長くなるのでとりあえずこの辺にしておこう。

次元観察子 $\psi 4$ の意識と化粧の意識を絡めて考えると分かりやすいのではないだろうか？

偶数系の観察子の話は、奇数系と違って日常的に意識する側なので、普段の生活でやっていることから理解することができる。

37. 知性と情動の対化

前回の化粧の話で『次元観察子 ψ 4』は「美意識」にも絡んでくることをちょっと書いた。それとも関連して、構造の話に付随するイメージの話をしていこう。

次元観察子 ψ 3と『人間の外面』は「夜の世界のイメージ」となっていることを、『夢の世界のビジョン』の項で以前に説明した。

[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(30) ～夢の世界のビジョン～]

一方で、次元観察子 ψ 4と『人間の内面』は「昼の世界のイメージ」ということになっている。

OCOT情報も、昼と夜は「対化」の表現だと言っていた。昼は人間の内面で、夜は人間の外面の現れだつてこと。確かに、人間は昼間は客観世界（延長）の中で生き、夜は主観世界（持続）に生きるのが基本。これは表相が等化された世界と、表相を中和した世界（表相の等化を無効にする）の関係とっていいかもしれない。

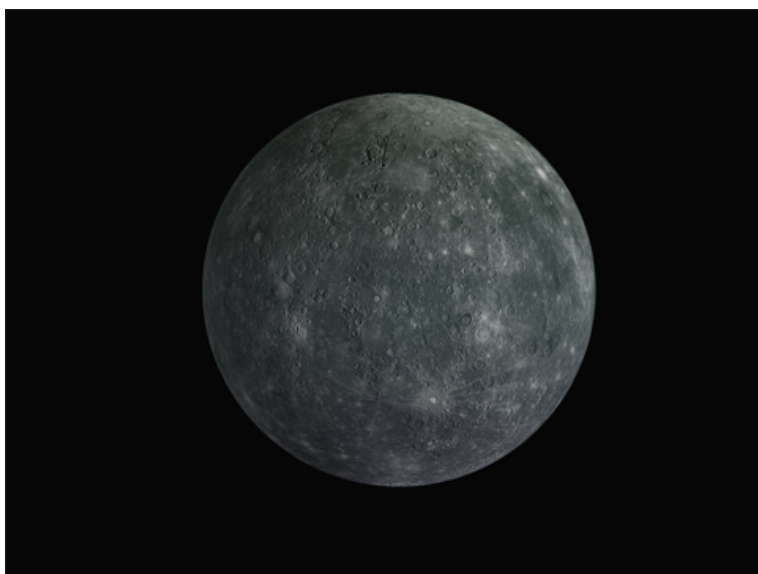
『人間の内面』は昼のように明るい世界なので、綺麗なものが映えるようになるわけである。

それは、日光を存分に受けて輝く花のようなものだろうか？



また、次元観察子 ψ 3は惑星だと「水星」が関係してくる話をした。

ψ 3を認識すると、その上位にある『大系観察子 Ω 3』が微かに分かってくるからである。



一方で、次元観察子 $\psi 4$ は「金星」が関係してくると言うことができる。

これもつきつめると金星の本質は『大系観察子 $\Omega 4$ 』だったり、『次元観察子 $\psi 10$ 』だったりもするのだが・・・

次元観察子 $\psi 4$ とも紐づくので、そのように理解しておこう。



西洋占星術的な金星の意味は「美」「魅力」「恋愛」「喜び」「快楽」などである。

これらは「見られる」ことを先手とした人間の心から生じるものだったり、受動的な意識だったりするため、次元観察子 $\psi 4$ から出てくる付随イメージとして紐づけても良いと思う。

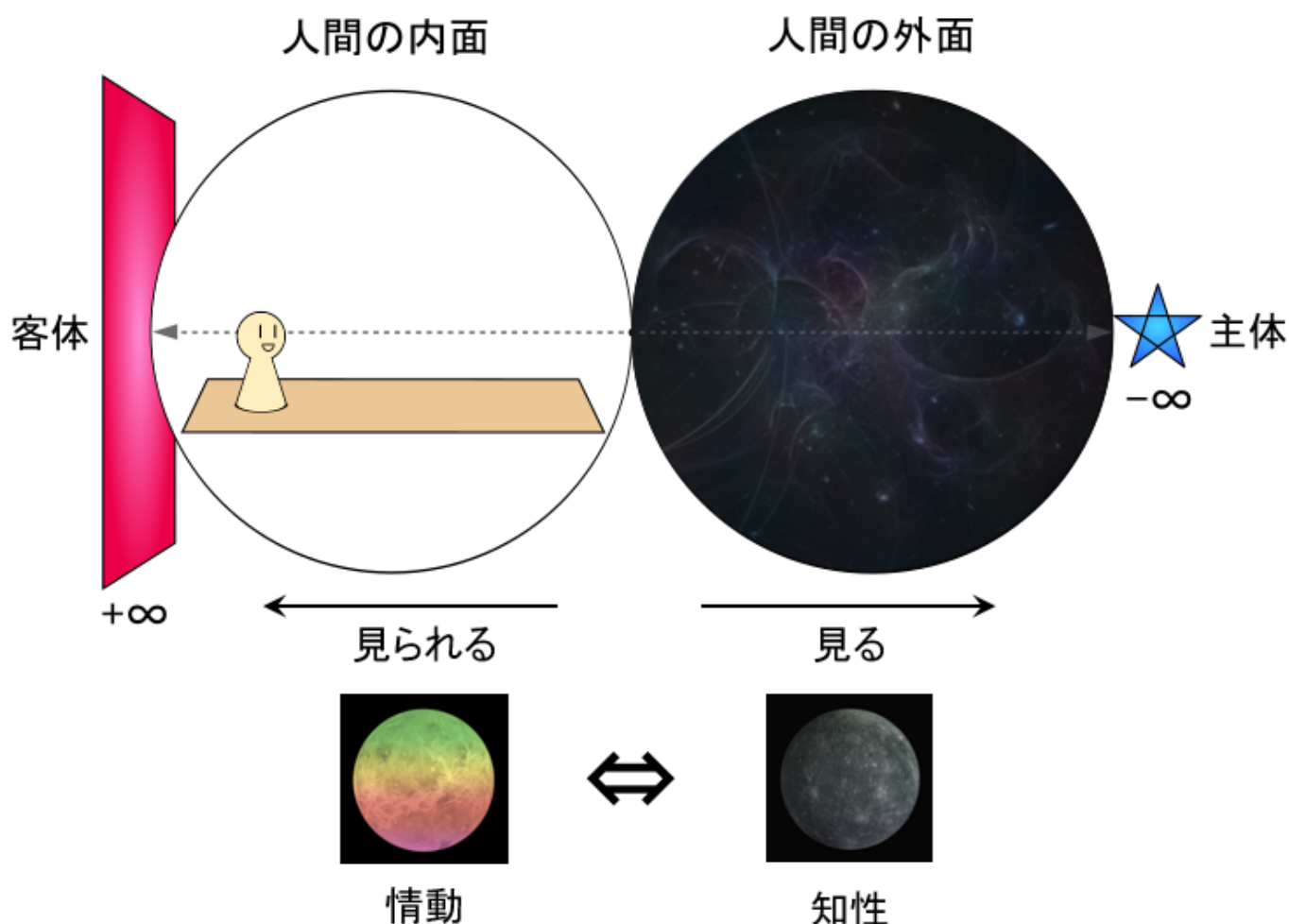
■ 水星と金星、知性と情動の対化

占星術における金星の意味は全体的に「情動」から発しているものなため、「情動」を象徴するものと言うこともできる。

一方で、水星は西洋占星術では「知性」を象徴するものだと言われている。
 また、水星の知性は「能動的なもの」であり、金星の情動は「受動的なもの」だと言することができる。
 ヌーソロジーの $\psi 3$ と $\psi 4$ の関係は「見る」と「見られる」の関係になっているわけだが、
 「見る⇒知性で動くこと」「見られる⇒情動で動くこと」に繋がっていく場合、
 「 $\psi 3$ と $\psi 4$ の対化」は「知性と情動の対化」にも付随してくるようになってくる。
 また、 $\psi 3$ と $\psi 4$ の対化と連動して、それより上位の「 $\Omega 3$ （水星）と $\Omega 4$ （金星）の対化」が出てくること
 にもなる。

つまり、次元観察子 $\psi 3$ と次元観察子 $\psi 4$ の対化を扱っていくと、
 能動的な知性と受動的な情動の対化が繋がって表れてきて、
 それは大系観察子 $\Omega 3$ と大系観察子 $\Omega 4$ の対化にもなるのである。

（つきつめると、それらは『 $\psi 9$: 思形』と『 $\psi 10$: 感性』の関係とも繋がってくるのだが・・・それはまた別の話・・・）



ヌーソロジーではそれら双方を『等化』していくわけだが、
 「知性」と「情動」を能動的に使いこなすような意識と紐づいてくるため、その対の関係をよく理解して
 おこう。

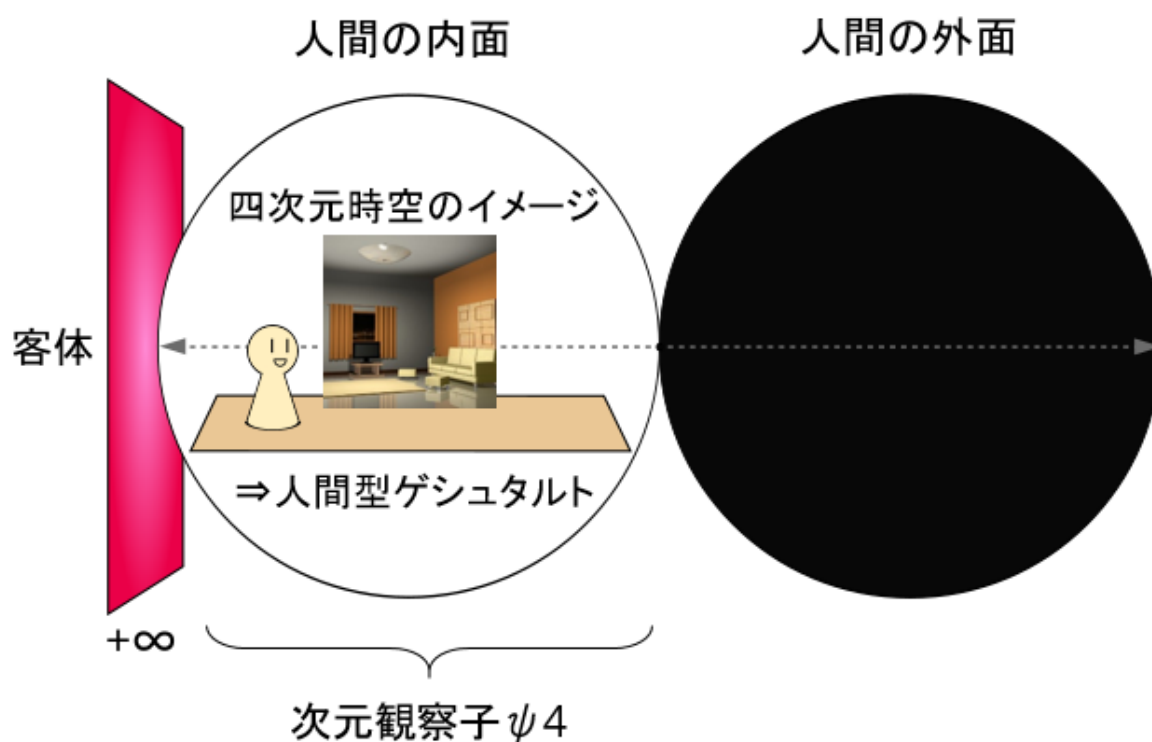
38. イメージの世界を脱却できるか？

『次元観察子 $\psi 4$ 』は「見られる」意識にあり、「鏡面」がベースになっていると、これまで説明していった。そして、そこから派生して「イメージ」が作られることが重要であり、その「イメージ」が『人間の内面』となる。

ヌーソロジーで『人間型ゲシュタルト』と呼ばれる四次元時空のイメージもそうしてできている。



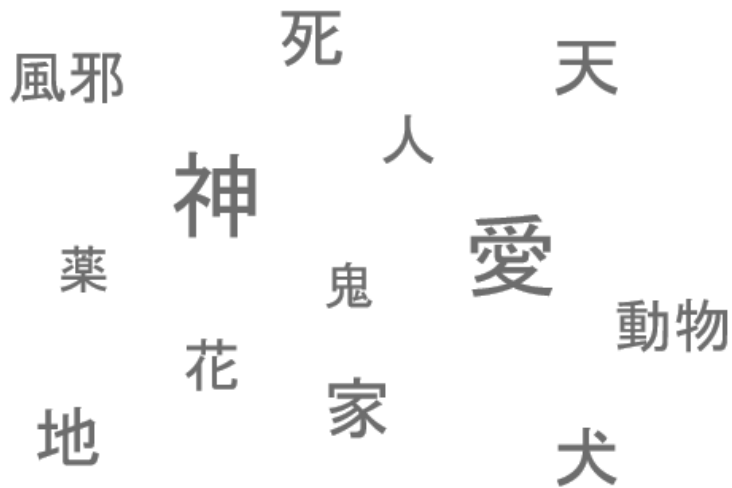
(四次元時空のイメージ)



したがって、次元観察子ψ4は「イメージ」の苗所として機能する特徴もある。

そして、「鏡面」の他にも「イメージ」を作る元となるものがある。

それは・・・「言葉」である。



そもそも、人間は動物の中でも、言語を扱うように進化した特異な動物であり、それによって他の生物を圧倒するような文明を作りあげていった。

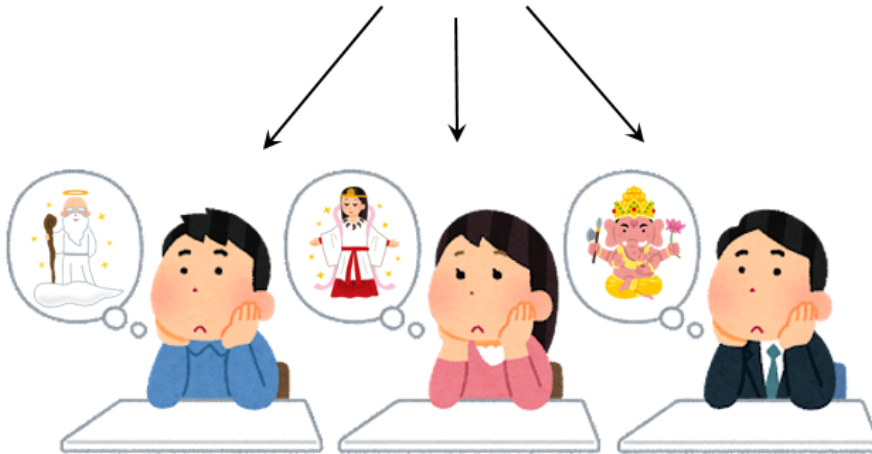
人間が使う言語の中にある様々な言葉も、イメージを作り上げて、そこに固執させるものとして機能する。

星の数ほどある人間が作った無数の言葉のうち、最も抽象度が高く最もイメージが難しい二大概念は、

「神」と「愛」の二つなのでは？と思う。

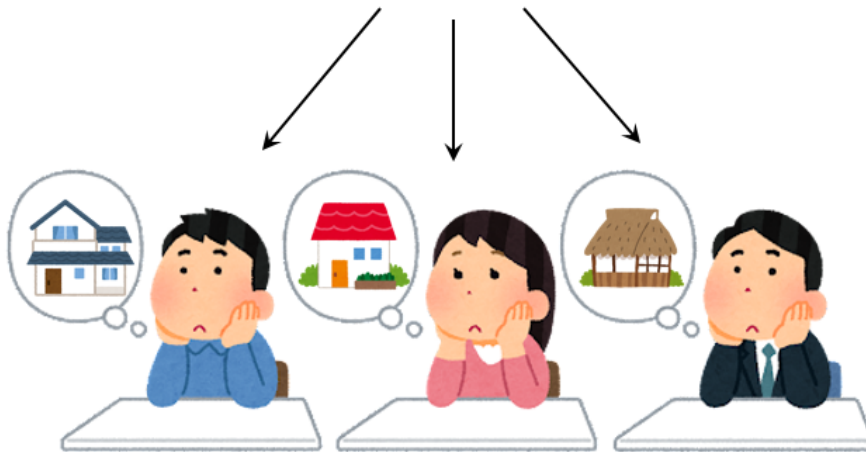
「神」といった言葉を聞いた時、人は何かをイメージするし、そのイメージは人によって異なる。

神



「家」みたいな言葉ぐらい具体的であれば、
イメージもしやすいだろうが、やはり人によって微妙に異なるだろう。

家



人間はそんな感じでイメージをベースにして世の中を捉えているし、あらゆる思考のベースが自身の経験から浮かんだイメージに基づいていることもある。

また、自分が捉えたイメージが他人と同じとは限らないし、その違いには気付きづらい。

そして、自分が捉えたイメージが真実とは限らないし、エゴによって作られた偽造のようなものかもしれない。

ヌーソロジーのような真理に向かう道は、その偽造に気付く道でもある。

■ ヌーソロジーと言語学

ヌーソロジーは哲学なので、既存の西洋哲学が絡んでくることは言うまでもないが、この辺は特に言語学関連の哲学が絡んでくる。

近代言語学で有名なフェルディナン・ド・ソシュールは

19 世後半紀頃に活躍し、「シニフィアン」と「シニフィエ」という概念を提唱した。

シニフィアンは「記号表現」と訳されるもので、伝えたいことを言葉として表す際の表記や音声に該当する。

シニフィエは「記号内容」と訳されるもので、シニフィアンを受けて連想されるイメージや、その意味に該当する。

ソシュールのこうした哲学は、後にジャック・ラカンも影響を受けて、

ラカンの精神分析学でもシニフィアンとシニフィエについて扱われている。

シニフィアン
(記号表現・言葉)

シニフィエ
(記号内容・イメージ)

家



人が何か言葉を受けた場合、シニフィアン（記号表現）として表れているものを受け取り、その意味をシニフィエとしてイメージするが、

その言葉が伝えたい本来の概念と、自身のイメージしたものが異なっていることはよくあることである。

先ほども説明した通り、人が言葉を受けてイメージするものは人によって微妙に異なるため、正確なその本来の意味はそう簡単に分かるものではない。

特に「神」や「愛」のように抽象度の高い言葉ほどそうになってしまう。

そうした時、各自の浮かんだイメージが「その言葉が意味するもの」と捉えて、そのイメージに固執してしまう。

また、そうしたイメージには「それが真実であって欲しい」という欲望や情動がつきまとい、情動によって信じたいものを決めることもあるし、情動によってイメージから抜け出せないこともある。

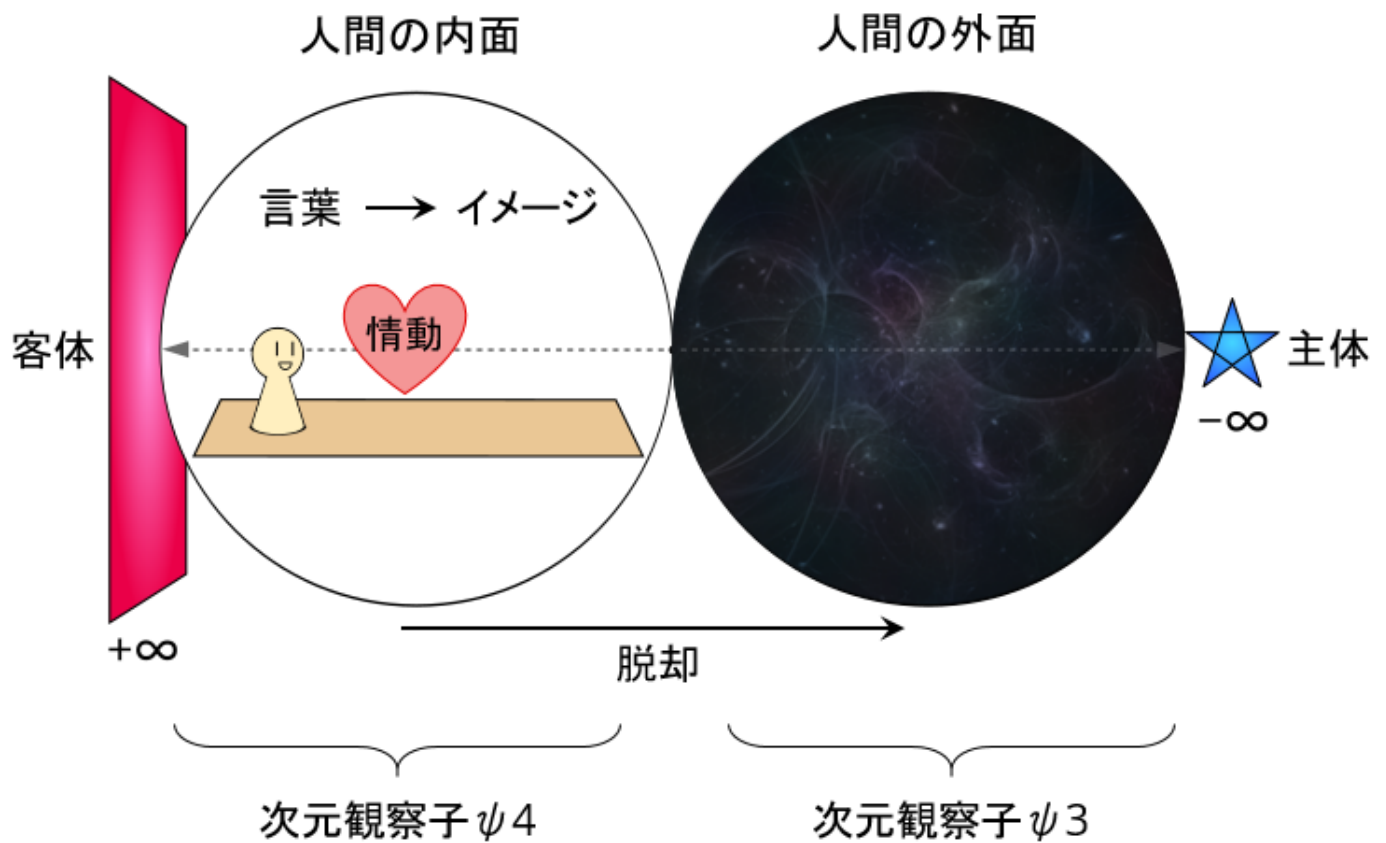
神



人間は次元観察子 ψ 4のように受動的な意識でイメージを扱うのが普通であるため、前回説明したような「情動」がそこに結びつく。さらには利己的な欲望や自尊心もそこに結びつき、頑固なゲシュタルトを形成することが一般的によくある。

受動的な意識でいると、言葉が作るイメージの強固なゲシュタルトに固執するのが普通の間人であるため、言語によって人間型ゲシュタルトが強固になることが哲学では一般的な原理とされる。加えて、そこに欲望や情動が重なると一層強固になる。

そこで、ニューソロジー的に『次元観察子 ψ 3』や『人間の外面』に向かうと、そこから脱却する方向性が開かれるわけである。



『変換人型ゲシュタルトの本論に入る前に』の項で、

「ψ3が分かると見た目に騙されずらくなるので有意義なことになる」とちょろっと書いたが、それはイメージの固執から脱却する知性を得ることができるからである。

次元観察子ψ4と次元観察子ψ3の関係から、
そうしたことにまで気付くことができれば良いと思う。

39. $\psi_3 \sim \psi_4$ までを整理しよう

「次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ 」について一通り説明してきた。
ここまでの内容を一旦整理しよう。

まず、『次元観察子 ψ_3 』を認識しなければ、
その『反映』である『次元観察子 ψ_4 』を能動的に意識することはできない。

$\psi_1 \cdot \psi_2 \cdot \psi_3 \cdot \psi_4$ は、
それぞれ『負荷』・『反映』・『等化』・『中和』の関係になっていて、
4番目の『中和』は3番目の『等化』の『反映』と言うこともできるので、
まずは3番目の理解をしっかりとやる必要がある。

あらゆる方法を駆使して次元観察子 ψ_3 を定着させよう。

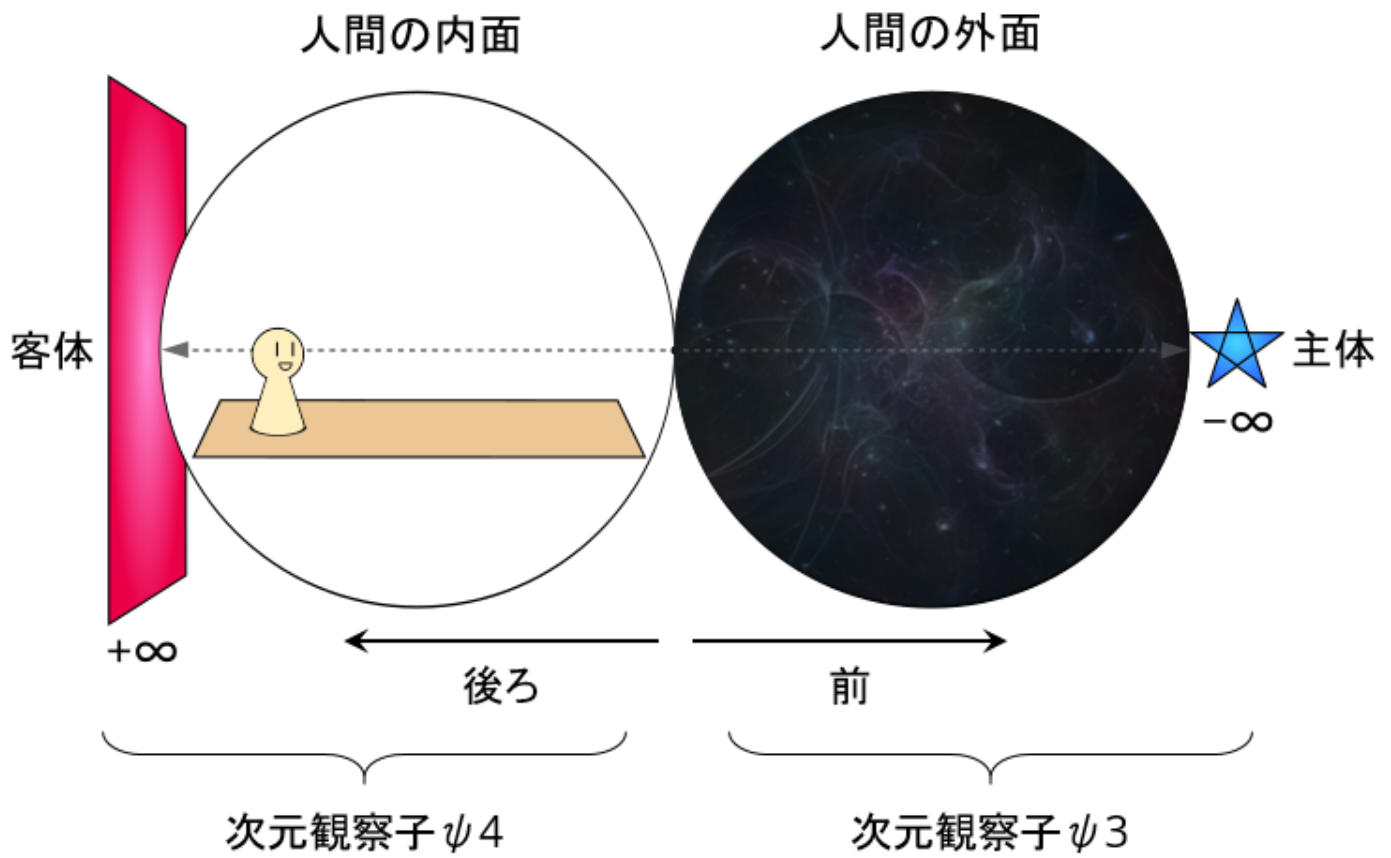
[リンク：■変換人型ゲシュタルト論(29) ～「外面（前）」と「内面（後ろ）」のおさらい～]

次元観察子 ψ_3 がある「知覚正面」の垂直方向にあるものが『垂子』である。
その前方向の無限遠点には ψ_3 が紐づいていて、
逆に、後ろ方向にある無限遠点には ψ_4 が紐づいている。

無限遠点と言っても、垂子次元の感覚だと距離はあまり関係ないため、
 ψ_3 は単に「前にある」ように、
 ψ_4 は単に「後ろにある」という理解でも良い。

それから、前側にあるのが『人間の外面』。
後ろ側にあるのが『人間の内面』である。
また、前方向の無限遠点に『主体』があり、
後ろ方向の無限遠点に『客体』がある。

それらの仮像を図にすると以下のようなになるわけである。



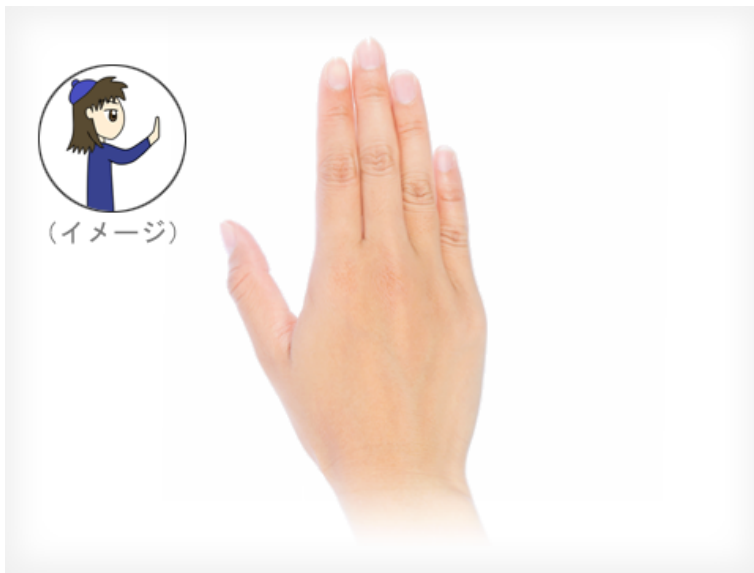
これをさらに、自身の知覚正面において行う。

次にあるヌーソロジーたんのように「平手出しの構え」をした場合、平手を出した状態の知覚正面に『主体』と『次元観察子ψ3』がある。



※「前」を先手とした場合

それから、平手を出した状態で「手前」と「手前より後ろの空間」を意識した場合、
『客体』と『次元観察子 ψ 4』がある。



※「後ろ」を先手とした場合

とりあえず、それらが整理できたら先に進んでいこう。

40. 「 $\psi_3 \sim \psi_4$ 」のキアスム

『次元観察子 ψ_3 』と『次元観察子 ψ_4 』についてこれまで説明してきた。

当たり前の話だが、これは自分だけが持っているものではなく、自分以外のたくさんの人達もそれぞれ持っているものである。

ψ_3 と ψ_4 は「主体」と「客体」を構成しているわけだが、100人の人がいたらそれぞれが固有の「主体」と「客体」を持っているように、 ψ_3 と ψ_4 は自分だけではなく色々な人がそれぞれ持っている。

つまり、自己にとっての ψ_3 と ψ_4 だけでなく、他者にとっての ψ_3 と ψ_4 も存在する。

他者にとっての ψ_3 と ψ_4 は「他者側の観察子」ということで、 ψ^*3 と ψ^*4 という記述で説明される。

(ψ^* はプサイスターと読む)

他者側の観察子には「*」をつけるのがニューソロジーの決まりであり、ニューソロジーを深掘りして学習していくと他者側の観察子の概念も出てくる。

それらを踏まえると、

「自己にとっての ψ_3 が、他者にとっての ψ^*4 の位置と重なり、自己にとっての ψ_4 が、他者にとっての ψ^*3 の位置と重なる」

という原理がある。

これを言い換えると、

「自己にとっての見える世界が、他者にとっての見えない世界であり、自己にとっての見えない世界が、他者にとっての見える世界である」

となる。

この意味が分かるだろうか？

今回はこれについて説明していきたい。

■ 他者の瞳孔と自己の瞳孔

自己と他者がシンプルに向き合った時、その二人がそれぞれ見ている景色がある。

ちょうど、[『視点変換3Dルーム』](#)で視点の切り替えができるので、それを使って説明しよう。

[リンク：「視点変換3Dルーム」というのをUnityで作りました]

視点変換3Dルームの2番目の部屋には誰かいるようになっている。

自分をA君として、この人をB君としよう。



まずは普通に映っている画面は「自分から見た景色」なので、「A君の視点」である。

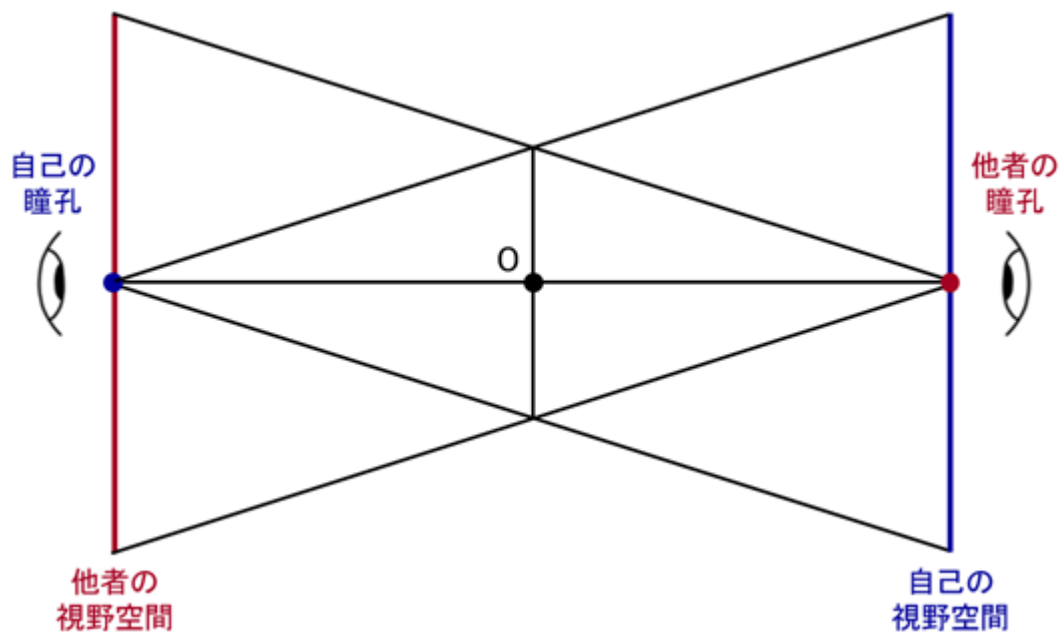
そこで「Please push space key.」というメッセージの通りに Space キーを押下すると、視点がB君に変わって「B君の視点」になる。



その時、自分の顔はB君からの視点になった時に初めて見ることができし、「自分の顔の後ろ側にある背景」もB君からの視点にならないと見えない。逆に、B君の顔は自分から見ることができし、B君の後ろの背景も見ることができし。しかし、B君の視点だとそれらを見ることができない。

ここで、B君の「後ろ側にある背景」をB君にとっての「見えない世界」、B君の「前側にある背景」をB君にとっての「見える世界」とした場合、A君からの視点と「見える世界」と「見えない世界」の関係が逆になっている。

また、A君の視点は「自己の瞳孔」で、B君の視点は「他者の瞳孔」とした場合、お互いの視野空間の関係は以下の図のようになっている。



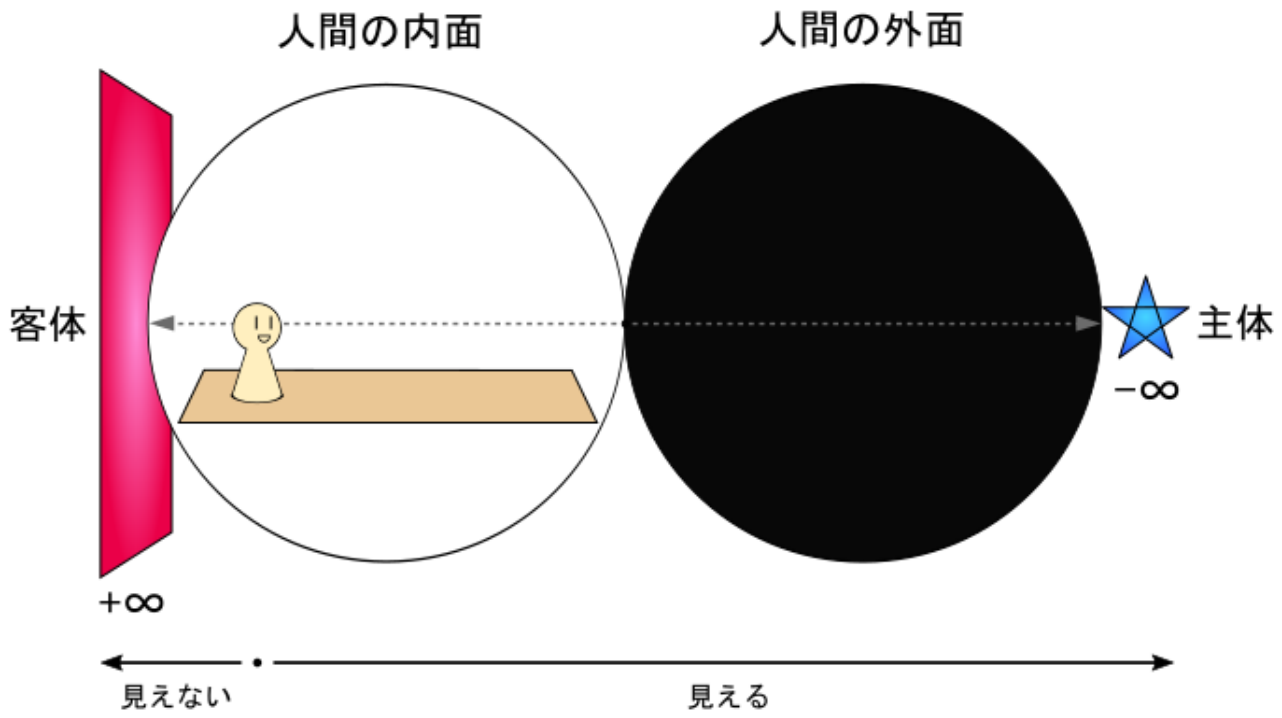
なんとなく分かってきたでしょうか？

■ 図示して整理する

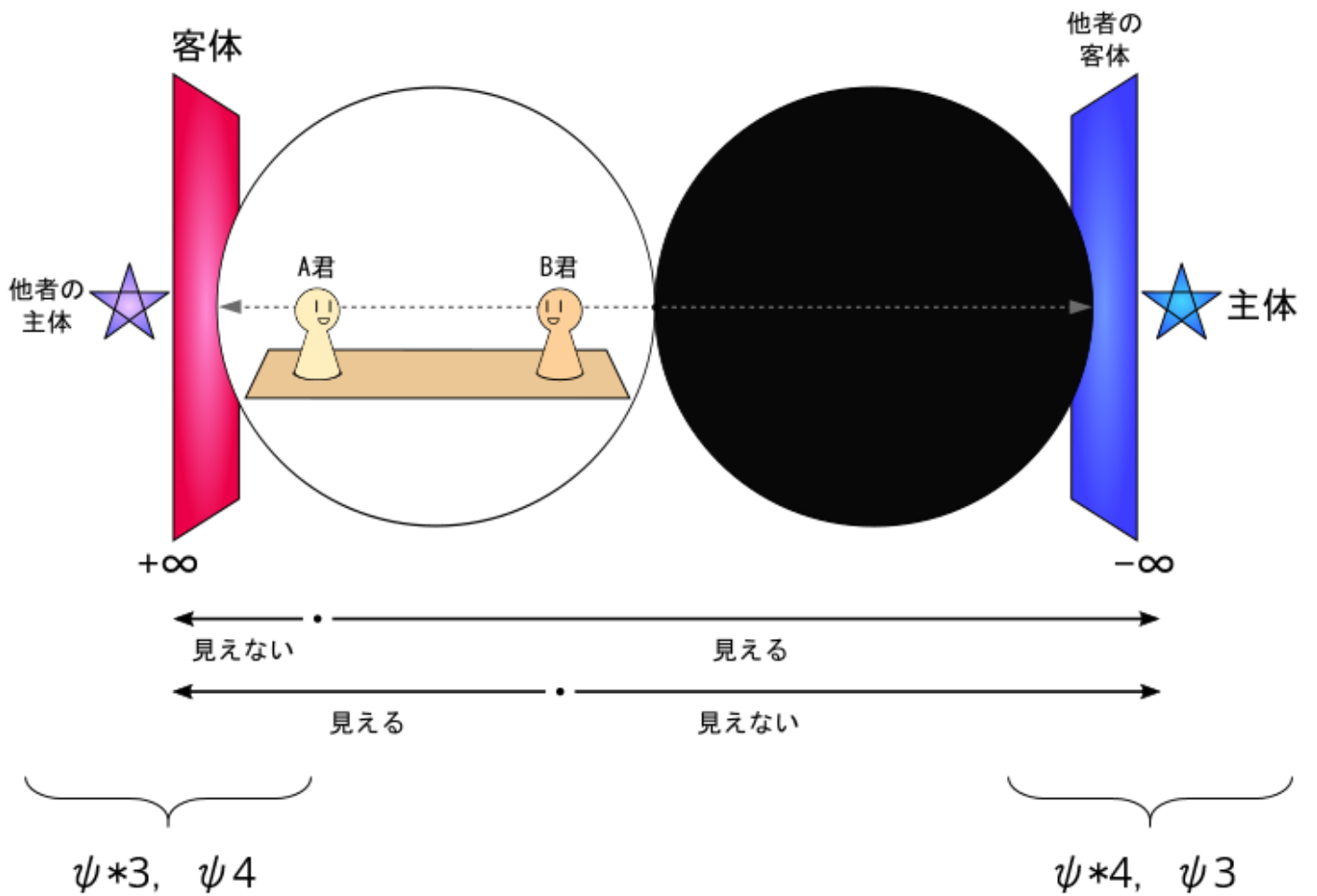
引き続き、自己と他者の視点の関係を整理していこう。

次元観察子 $\psi_3 \sim \psi_4$ においては、

自己側の観察子だけの図だと「見える世界」と「見えない世界」の関係は次のようになるが・・・



他者側の観察者も絡めると以下ようになる。



このように、他者視点まで考慮すると「主体/他者の客体」と「他者の主体/客体」の位置がそれぞれ重なったり、「 ψ^3/ψ^4 」と「 ψ^4/ψ^3 」の位置が重なったりする。

また、「見える世界」と「見えない世界」の関係も自己と他者で入れ替わったりするわけである。

以上のことから

「自己にとっての ψ^3 が、他者にとっての ψ^4 の位置と重なり、自己にとっての ψ^4 が、他者にとっての ψ^3 の位置と重なる」

「自己にとっての見える世界が、他者にとっての見えない世界であり、自己にとっての見えない世界が、他者にとっての見える世界である」

の意味がなんとなく分かっただろうか？

また、「他者の主体」と「他者の客体」を踏まえて人間関係を捉えてみるのも面白いと思う。

我々は普段の人付き合いにおいては、実は自身の「客体」と「他者の客体」同士で会話しているものである。

一見普通に会話してるようだが・・・お互いが「とりあえず見える部分で無難に話す」となると、浅いコミュニケーションのレベルの会話となる。

これは構造的に捉えると、客体同士のやり取りになっている。

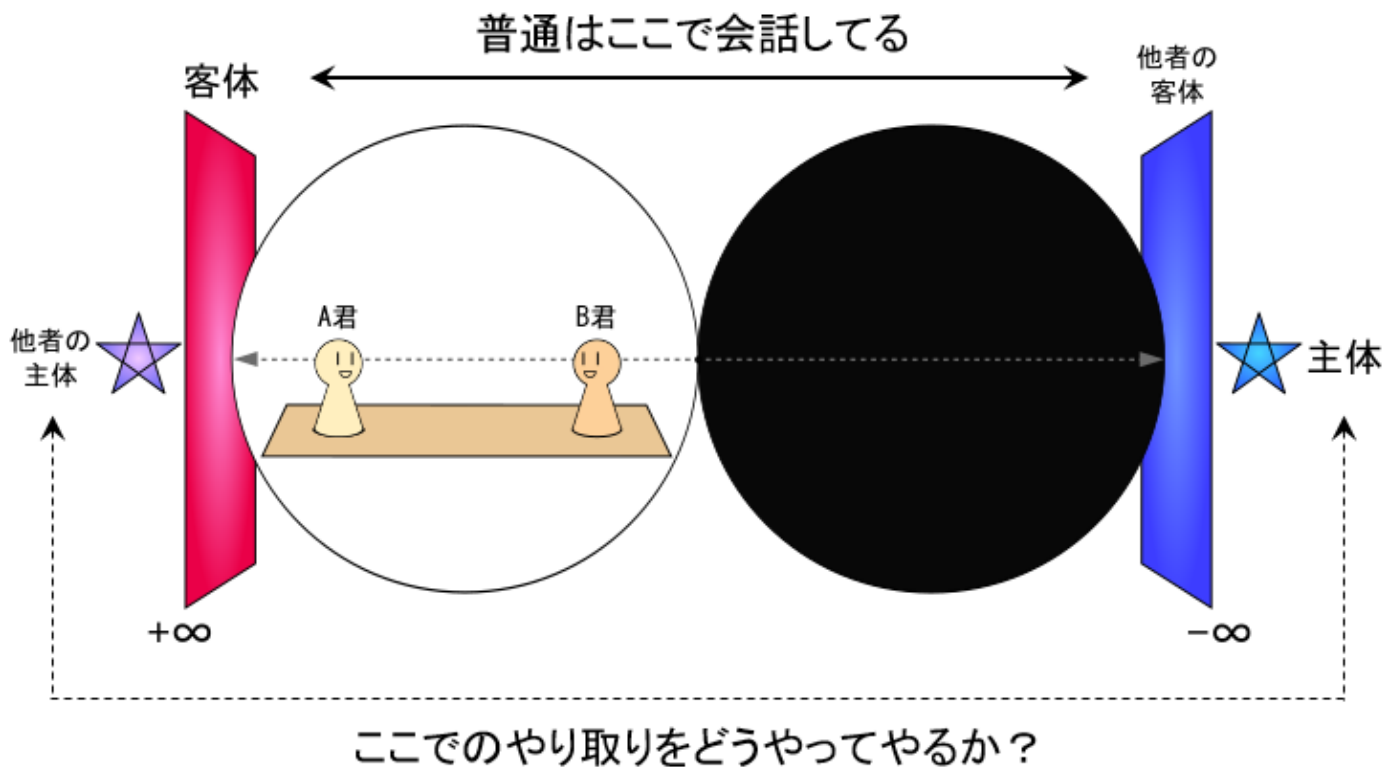
特にビジネス上での会話とか、打算と楽しさを重視するような浅いレベルの友人付き合いや、見た目を重視するような浅いレベルの恋愛付き合いだとその傾向が顕著になる。

もし、そこから深いコミュニケーションのレベルに入っていきたい場合は、

いかにして「主体」と「他者の主体」同士のやり取りに持っていくか・・・という話になる。

確かな「絆」とか「魂と魂のやり取り」はそういう所にあるため、

本質的な繋がりを作りたい人はそこに向かわなければならない。



日常における人間関係でそうしたことを考えてみるのも面白いと思う。

■ キアスムの奥深さ

このように、「自己×他者」で入れ替わる「2×2」の4要素の構造はヌーソロジーで『キアスム』と呼ばれていて重要視されている。

『キアスム』は汎用性の高い概念であり、何か難しい社会問題について考える場合でも重要で役に立ったりする。

難しい社会問題で善悪の問題について考えると、実は「自己×他者」の間で「2×2」の構造があることが分かっていると考えが深まるようになる。

いわば、一見すると善悪の対立のように見えるものは、深掘りすると「善悪×悪善」みたいな二重の構造になっているということである。

その意味が分かるだろうか？

例えるなら・・・戦争などもそういう構造になっているのではないだろうか？

自分の国にとっては善である正義を元に、相手の国を悪と認定しても、

相手の国にとってはそれが善であり、自分の国でやっていることが悪と認識されている。

それから、どうしてそういう状況になるのか？ その原因は何か？まで突き詰めていくと、どっちが悪なのか分からない実状が出てきたりもする。

そういう視点に立った場合、絶対的にどちらが善とは言わずらくなるのではないだろうか？

漫画作品だと『進撃の巨人』とかはそういう事象がとてもよく表現されていて面白いと思う。
この作品は最後まで読むほど色んなことが分かってくる。

〔書籍：諫山創『進撃の巨人（1）（週刊少年マガジンコミックス）』（2010）講談社〕

このように、「自己側が善で他者側が悪」という二元論思考では絶対に解決できない問題がそこにあり、これもまた『人間型ゲシュタルト』が作り出すものとされている。

ヌーソロジーの基本である『キアスム』の構造を理解することは、そこから抜け出すためにも必要なことだと言える。

また、 $\psi 3 \sim \psi 4$ における『キアスム』が分かると、それより上位の『次元観察子 $\psi 5$ 』の理解もやりやすくなるため、

先ほど説明した「見える世界/見えない世界」の関係についても頭に入れておこう。